

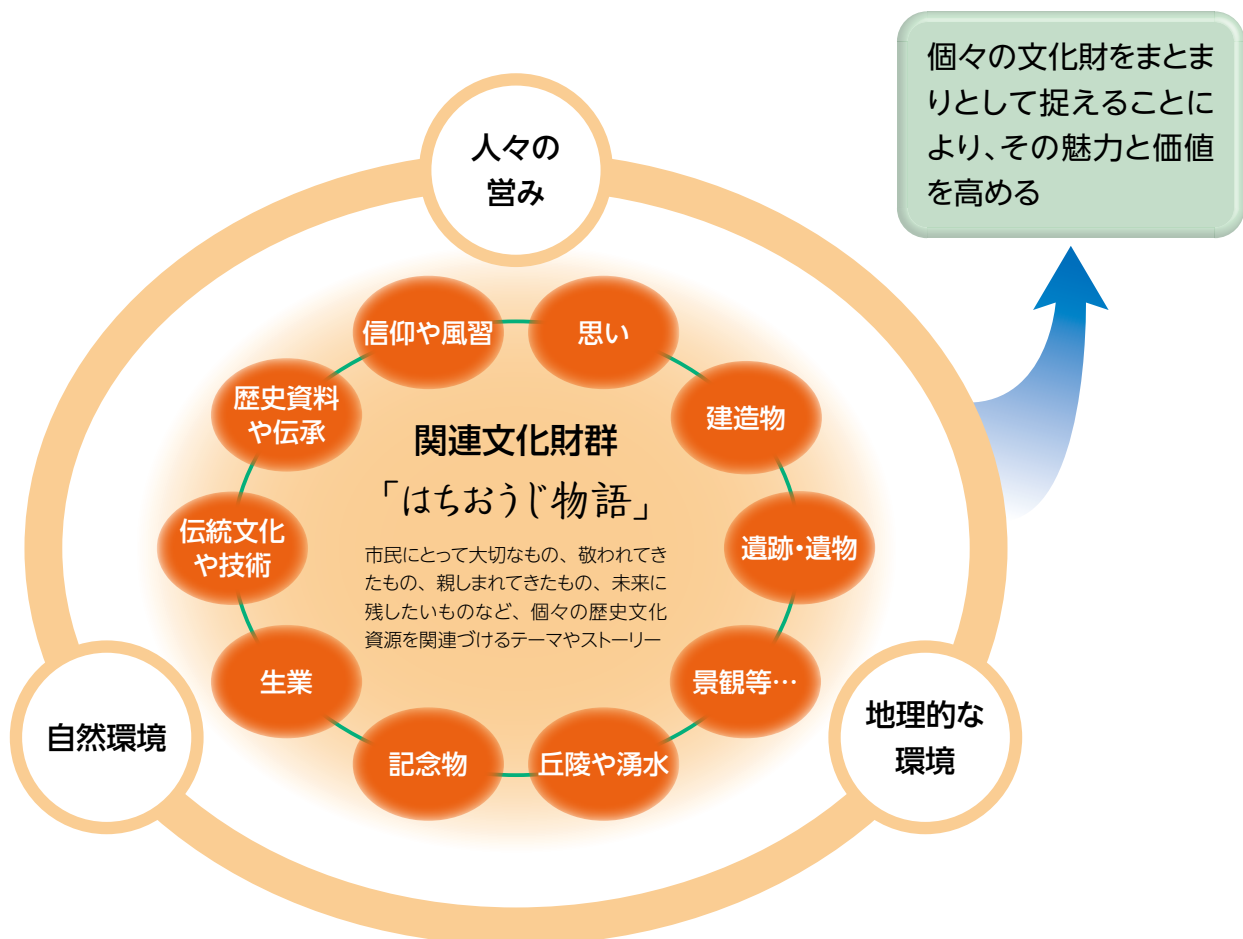
第4章 八王子の関連文化財群 「はちおうじ物語」

1. 関連文化財群の目的と方向性

第3章では、各地区の歴史文化を知るためのキーワードを抽出し、それを俯瞰的にとらえて共通性や特性の顕著さをもとに整理・検討し、「八王子の歴史文化の特徴」をまとめました。この特徴をわかりやすく市民に伝えとともに、歴史文化に対する意識を共有して文化財の保存・活用につなげていくために、テーマを設定し、ストーリーを組み立てて、歴史文化の特徴を構成する個々の文化財をその周辺環境を含め一体的に捉えた「関連文化財群」を設定します。

関連文化財群は、それぞれが八王子の歴史文化を描いた物語であり、私たちが先人たちから受け継ぎ、日常の中で大切にしながら親しんできたものを、未来に残していくための物語です。これを、市民にもわかりやすく親しみやすいものとするために、本構想で設定する関連文化財群を「はちおうじ物語」と名付けます。

今後、文化財が新たに指定・登録されたり、発見されたりすることによって、語るべき歴史文化の特徴が創出された場合は、新たなテーマを設定して「はちおうじ物語」を追加していきます。



関連文化財群の目的と方向性

2. 関連文化財群「はちおうじ物語」の構成

「はちおうじ物語」は、本市の歴史文化の特徴を「テーマ」で端的に表現しつつ、読み手の興味を引くためにテーマにちなんだ「Q&A」の形で表記しています。サブタイトルで疑問形の投げかけをして、「ストーリー」の中でその疑問を解き明かしていきます。そして、構成文化財の説明や所在、伝えられているエピソード、文化財の保存・活用の事例などを紹介して、読み手が自分のまちの歴史として理解を深めつつ、歴史文化を体験し、語り伝えられるものとなるような構成にしました。

「八王子市の歴史文化の特徴」から導き出した10の「はちおうじ物語」は、次のとおりです。

歴史文化の特徴	「はちおうじ物語」のテーマと時代背景				
	原始・古代	中世	近世	近現代	
原始・古代の歴史文化	其の一	原始・古代の遺跡が語る人々の営み			
交通の要衝としての歴史文化	其の二	東西南北いにしえの道			
中世の歴史文化	其の三	中世の武士たちと「まちづくり」の礎			
近世の歴史文化	其の四	八王子宿と千人同心			
絹織物の歴史文化	其の五	桑都八王子は織物のまち			
絹の道の歴史文化	其の六	世界とつながった絹の道			
自然との共生による歴史文化	其の七	自然との共生で育まれた里			
高尾山の歴史文化	其の八	祈りのお山高尾山の魅力			
地域に伝わる伝統文化	其の九	季節を彩る年中行事と伝統文化			
石碑や地名から読み解く地域の歴史	其の十	地名や石碑に残る地域の記憶			



原始・古代の人々は、 八王子でどんな暮らしをしていた？

八王子は、原始時代からの人々の生活の痕跡が見られる「遺跡のまち」です。遺跡からは石器や土器などの様々な遺物が発掘されています。遺物の発掘場所や地面からの深さ、種類や形状などから、原始・古代の人々の暮らしがわかってきます。特徴的な遺物から、遺跡が語る原始・古代の人々の暮らしを読み解いてみましょう。



辺名遺跡

自然豊かな地形に恵まれた八王子は、自然の恵みを糧とする原始・古代の人々にとって、住みやすい地域だったと考えられます。

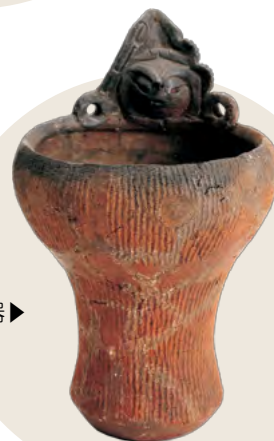
およそ3万5000年前の旧石器時代の人々が暮らしていた痕跡が多摩ニュータウン№402遺跡(松木)で確認されています。そのほかにも市内各地域で、旧石器時代から平安時代にかけての人々の生活の痕跡が数多く見つかっています。

様々な造形美を感じさせる縄文土器からは、厳しい狩猟採集生活の中でも、人々が創造性に富んだ豊かな心を持っていたことが感じられます。例えば、発掘された「子抱き土偶」や「土鈴形土偶」には、母親の愛情が感じられる造形が施されています。

八王子に暮らした人々は、遥か昔から自然と共に歩み、共同生活を営み、人や自然に対する優しさを持ち合わせていたのでしょう。そうした人々の心は、人や地域とのつながりを大切にしながら暮らし、発展してきた八王子の根底に受け継がれているのかもしれません。



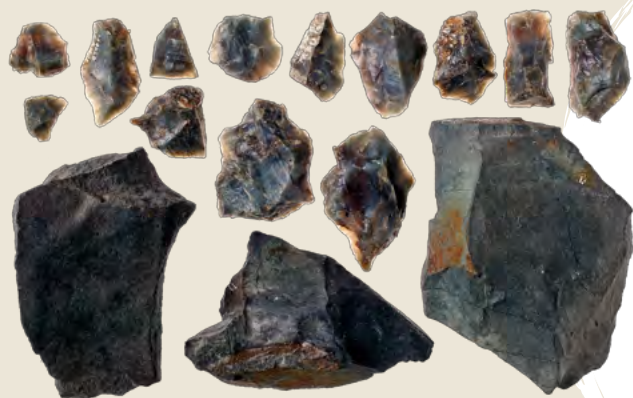
とつて把手付深鉢



人面裝飾付土器

遥かなる原始・古代の生活

八王子には、遥か昔から人々が暮らし続けてきました。縄文人が残した子抱き土偶から感じられる愛情表現や芸術性の豊かさは、今の時代を生きる私たちに、命を大切にする心、郷土や自然を愛する心について、時を超えて語りかけているかのようです。それでは、発掘された八王子から、いにしえの人々の暮らしに思いをはせてみましょう。



市内最古の遺跡から出土した石器
(東京都埋蔵文化財センター)

◎ 豊かな自然との共生 ◎

およそ3万5000年前の石器が多摩ニュータウンNo.402遺跡で見つかりました。これは八王子で最古の人の痕跡といわれています。やがて、人々は狩猟採集生活に適したこの土地に定住しました。

数万年の時を経て、わたしたち現代人も同じ丘陵地にニュータウンを建設しました。自然豊かな土地で暮らしたいという思いは、昔も今も変わりません。

◎ 縄文土器の造形美 ◎

縄文土器特有の立体的な模様や造形には、製作者の創造性に富んだ豊かな心が感じられます。実用性から切り離されたその造形美は、縄文人の暮らしの中に息づく美意識を伝え、現代人を魅了しています。



把手付深鉢(滑坂遺跡)
高さ約52cm



ジョッキ形の深鉢(日南田遺跡)
高さ約14cm

土器・土偶から ◎ 感じられる優しさ ◎

妊婦をかたどった「土鈴形土偶」や赤ちゃんを抱いた「子抱き土偶」からは子育ての様子がうかがえ、命を大切にしようという優しさ、家族愛が感じられます。また、とても小さな「ミニチュア土器」は、子どものおもちゃや祭祀の道具に使われたと考えられています。



ミニチュア土器(神谷原遺跡)
手前左高さ約3cm



土鈴形土偶(檜原遺跡)
高さ11cm



子抱き土偶(宮田遺跡、複製)
高さ7cm



イノシシ形土製品(滑坂遺跡)
高さ6.3cm

◎ 自然への畏敬 ◎

縄文時代の集落の遺構が発見された滑坂遺跡(みなみ野五・六丁目)から、可愛らしいイノシシ形の土製品が出土しました。イノシシは、一度に4~5頭の子どもを産む多産の象徴として知られています。その生命力に、自らの繁栄の願いを託していたのでしょうか。イノシシや自然への畏敬の念が感じられます。

◎ 珍しい小銅鐸 ◎

弥生時代の青銅器「銅鐸」は、一般的にはその高さは10~140センチメートルですが、中郷遺跡(長房町)で出土した小銅鐸の高さはわずか3.3センチメートルで、都内では2例しか出土していない珍しいものです。小さな銅鐸は、祭祀で用いられたと考えられます。祈りは、このころの人々にとっても大切なことであったのでしょうか。



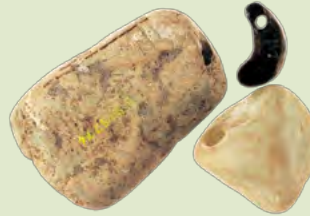
小銅鐸(中郷遺跡)
高さ3.3cm

原始時代の人々の衣・食・住

アクセサリー

縄文時代は身体装飾が盛んな時代だったようです。首飾り・耳飾り・腰飾りなどを身に付け、その素材は、石・土・木・骨・牙・貝など多種多様なものでした。

中でも耳飾りは、縄文社会の中で一番身近な装身具だったようで、埋葬人骨を調査した結果として、耳飾りを装着した性別は2対1で女性が多いとの報告があります。



装飾品の勾玉と垂飾
(滑坂遺跡)



縄文時代の衣服
(東京都埋蔵文化財センター所蔵)



木の実をすりつぶすための石皿と磨石
(東京都埋蔵文化財センター所蔵)

どんぐりクッキー

縄文時代の食は、旧石器時代以来の狩猟・植物採集、そして漁労によって支えられたといわれています。具体的には、イノシシやシカなどの動物やどんぐり、トチ、クルミ、クリなどを食べて生活をしていました。中でもどんぐりは、貴重な主食の一つでした。

そのどんぐりを石皿と磨石で粉にして焼きあげた「どんぐりクッキー」は、縄文時代の遺跡から発見されたことから「縄文クッキー」とも呼ばれています。

なめがきか 滑坂遺跡

縄文時代中期の環状集落の遺構などが発見された滑坂遺跡(みなみ野五・六丁目)では、89棟の住居跡や炉穴、イノシシなどの動物を獲るためのおとし穴の遺構が見つかっています。また、大形深鉢などの土器やイノシシ形土製品、装飾品の勾玉や垂飾なども発見され、調査結果から当時の人々の暮らしを垣間見ることができます。



環状集落の遺構



住居跡出土の土器

古代の人々の暮らし

地域の首長が築いた古墳

八王子市域には、川口古墳、小宮古墳、鹿島古墳、^{ひよどりやま}鶴山古墳、狐塚古墳、北大谷古墳など数多くの古墳があります。都指定旧跡の北大谷古墳(大谷町)は、凝灰岩質砂岩の切石を積み重ねた横穴式石室を持つ、7世紀ごろに築造された多摩地域最大の円墳です。

北大谷古墳（都指定旧跡）

朝廷に献上する馬を育てた牧

平安時代、多摩川の上中流域には、「牧」と呼ばれる牧場がありました。これらの牧のうち、特に「勅旨牧」と言う朝廷直轄の牧場では、馬を飼育・調教し、毎年一定の頭数を朝廷に献上していました。八王子市域には、由比牧と石川牧、小野牧があったと考えられています。



一大窯業拠点

武蔵国府などに瓦や須恵器を供給した御殿山窯跡群は、南関東最大の窯跡群である南多摩窯跡群の中にあります。御殿山窯跡群は東西約3キロメートル、南北約1.5キロメートルという広範囲に及び、少なくとも200基を超える窯が造られたと考えられ、一大窯業拠点となっていました。



主な構成文化財

① 梶田遺跡



国史

〔梶田町〕

縄文時代中期の良好な集落跡で、^{たてあなじゅうきょ}竪穴住居が多数発見され、数百年にわたり居住の場としてくりかえし利用されてきたことがわかる遺跡です。一部を遺跡公園として整備し、現在は「国史跡梶田遺跡公園」として一般に利用されています。

② 船田石器時代遺跡



国史

〔長房町〕

縄文時代中期末から後期初頭の、敷石住居が現われはじめる時期の敷石住居跡が発見された貴重な遺跡です。住居は直径5メートルほどの範囲に扁平な川原石を敷いたもので、中央に直径60センチメートルほどの炉があり、土器が埋められていました。

③ 北野石器時代住居跡



市史

〔北野町〕

縄文時代後期の2本の石棒を伴う敷石住居跡です。昭和16年(1941年)に当時の市立由井第一小学校敷地内で発見されましたが、区画整理に伴い、昭和38年(1963年)に北野天満社に移築されました。

④ 北大谷古墳



都旧

〔大谷町〕

凝灰岩質砂岩の切石を積み重ねた、全長約10メートルという多摩地域最大規模の石室を持つ、直径39メートルの円墳です。古墳時代後期のもので、多摩地域に覇権を及ぼした有力者の墳墓と考えられています。

⑤ 中田遺跡



市史

〔中野山王三丁目〕

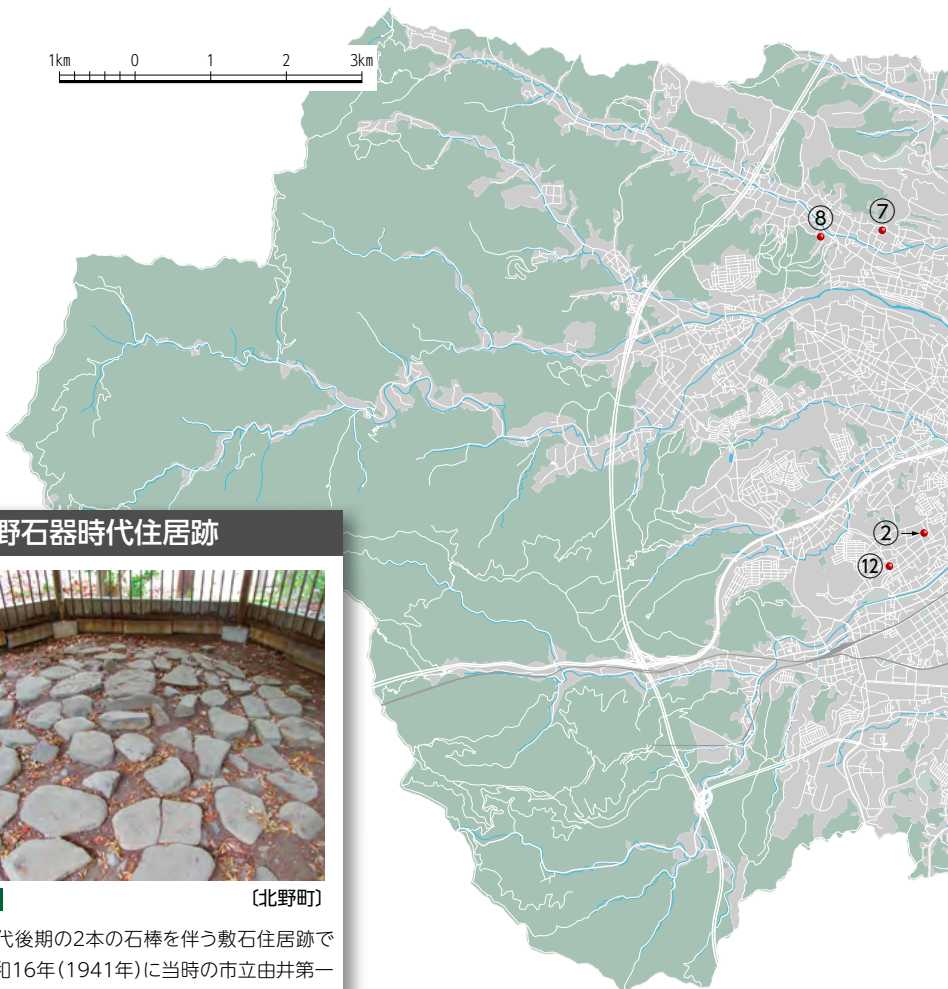
縄文時代から奈良・平安時代まで続く集落の遺跡です。特に古墳時代後半から奈良・平安時代にかけての遺構が多く、川口川のほとりで水田を耕して、農業を営んでいたムラだったと考えられています。一部を遺跡公園として整備し、現在は「中田遺跡公園」として一般に利用されています。

⑥ 御殿山窯跡群



〔鍵水・宇津貫町・七国一〜三・六丁目〕

御殿山窯跡群は、平安時代に瓦や須恵器の一大産地だった窯業拠点の遺構です。そのうち八王子みなみ野シティ地区で発掘された47基の窯跡からは約4万個の須恵器が出土しており、膨大な生産量を誇っていたことがうかがえます。



国史：国指定史跡

都府：都指定有形文化財

市有：市指定有形文化財

※出土品については発掘地を示しています

都旧：都指定旧跡

市史：市指定史跡



⑦縄文式土器



市有 考古資料

市内の各遺跡からは、数多くの縄文土器が出土しています。中でも、旧都立第二商業高等学校旧蔵の中原遺跡(川口町・犬目町)、小比企向原遺跡(小比企町ほか)で出土した縄文土器には顔面把手付土器などの優品が見られ、一括して市の有形文化財に指定しています。現在、郷土資料館が所蔵しています。

⑧子抱き土偶



昭和43年(1968年)に都立南多摩高等学校(現都立南多摩中等教育学校)の生徒が、宮田遺跡(川口町)から発掘した縄文時代中期の土偶です。幼子を抱いた土偶はとても珍しく、日本で初めての発見でした。現在、国立歴史民俗博物館が所蔵し、郷土資料館には複製があります。

⑨イノシシ形土製品



滑坂遺跡(みなみ野五・六丁目)から出土した縄文時代の土製品です。腹部に乳首を表現した造形が特徴的で、イノシシを多産で生命力の強さを備えた母性の象徴として作られたと考えられています。現在、郷土資料館が所蔵しています。

⑩ジョッキ形深鉢



意匠を凝らした造形が特徴的な縄文時代中期の土器で、ほぼ完全な形で日南田遺跡(寺田町ほか)から出土しました。高さ11センチメートル、口径7〜8センチメートルで、太い持ち手が特徴的です。現在、郷土資料館が所蔵しています。

⑪宇津木向原遺跡方形周溝墓出土品



都府 考古資料

昭和39年(1964年)に、宇津木向原遺跡(宇津木町ほか)で縄文時代から弥生時代の住居跡や古墳の周溝が発見されました。ここで発見された四方を溝に囲まれた墓跡は、全国で初めて「方形周溝墓」と命名されました。この遺跡の方形周溝墓からの出土品は、都の有形文化財に指定されており、現在、郷土資料館が所蔵しています。

⑫小銅鐸



弥生時代末から古墳時代初頭のもものと推定される小銅鐸で、中郷遺跡(長房町)で発見されました。総高3.3センチメートル、裾部分の長径2.6センチメートル、短径1.6センチメートルという、珍しい小さな銅鐸です。現在、郷土資料館が所蔵しています。

文化財の保存・活用事例

八王子市郷土資料館の展示と縄文体験

郷土資料館は、原始・古代の資料から近現代までの市内の歴史・民俗資料などを調査・研究・収集・展示し、郷土の魅力ある歴史・文化を学ぶ場として、また、広く情報を発信する拠点として様々な事業を行っています。

原始・古代の遺跡に関連する事業としては、市内の数多くの遺跡から発掘された出土品の展示や縄文時代をテーマにした体験プログラムを実施しています。毎年開催している火おこし体験と縄文土器づくりは、人気のイベントとなっています。



市内の遺跡から発掘された出土品



体験学習 火おこしと縄文土器づくり

東京都埋蔵文化財センターの展示とイベント

東京都埋蔵文化財センター(多摩市)は、多摩ニュータウン内で見つかった土器や石器類の出土遺物を収蔵するために、昭和60年(1985年)、多摩ニュータウンNo.57遺跡の西側部分を発掘調査して建設されました。展示ホールには、八王子市域(主に多摩ニュータウン遺跡)で発掘された土器なども展示されています。

原始・古代の暮らしを体験する「縄文食体験」「勾玉・耳飾りを作ろう」「植物の繊維から糸を作ろう」「ガラスでトンボ玉を作ろう」といったイベントも開催されています。



遺跡庭園「縄文の村」中期竪穴住居(復元)



縄文食体験

はちおうじ物語 其の二

東西南北 いにしえの道



かつて多摩川の往来に使われていた平の渡し跡

いにしえの道は

八王子に何をもたらしただ？

八王子の市内を、幹線道路や鉄道をはじめ多くの道が縦横に貫いています。これらの道は古くから八王子と他のまちを結び、多くの人や物が行き交うことで、八王子を交通の要衝として発展させてきました。八王子に発展をもたらした「道」の歴史を紐解いてみましょう。



鎌倉古道（鎌倉街道山の根の道）



中央線特別快速1号列車（昭和42年〈1967年〉）

「いざ鎌倉！」のために整備された鎌倉古道、甲斐からの武田信玄率いる大軍を北条氏照が迎え討った歴史の舞台となった滝山街道（古甲州道）、江戸時代の八王子に宿場町としての発展をもたらした甲州道中、横浜開港を機に輸出品の花形となった生糸を運ぶ道となった浜街道（絹の道）など、八王子を通る道は、それぞれ歴史の中で重要な役割を担ってきました。

近代には、甲州街道や浜街道などに沿うようにして鉄道が開通し、いにしえの道はその姿を変えましたが、八王子に交通の要衝として活発な交流や流通をもたらした、その役割に変わりはありません。道や鉄道は、人や物資だけでなく、時には文化や思想、教育なども運びました。まちとまちが結ばれることで、多くのモノ・コト・人が交流して産業や文化を育む基盤を形成し、相互に関わりながら発展して、八王子市は人口約58万人を擁する中核市となったのです。

寄居 (姉妹都市)

戦国時代、北条氏照の弟・氏邦が鉢形城の城主として、豊臣秀吉による小田原攻めの軍勢に対し籠城戦で抵抗しました。

寄居町とは、平成29年(2017年)に本市が市制100周年を迎えることを機に、戦国時代に広く関東を治めていた北条氏のゆかりから平成28年(2016年)に姉妹都市の盟約を結びました。



鎌倉街道山の根の道

五日市道は、五日市と八王子を結び、江戸時代には炭などが江戸へ運ばれていました。また、幕末から明治時代には、横浜から八王子を経て五日市へと西洋文化が流入してきた道でした。

五日市道(伊奈道)

古甲州道

佐野川往還(案下道)

八王子城跡

小仏関跡

高尾山

江戸時代、諏訪の高島藩諏訪氏、伊那の高遠藩内藤氏、飯田藩堀氏が参勤交代のため、小仏関所と八王子宿を通り、江戸へ向かいました。

富士道

小田原道



長野

棚畑遺跡(長野県茅野市)で出土した「縄文のビーナス」を模倣した土偶が、小比企向原遺跡で出土しています。

甲斐

戦国時代、甲斐国(現山梨県)の武田信玄は何度か八王子に攻めてきました。武田家滅亡の後、信玄の娘松姫が案下道を通り、八王子へ逃れてきました。その後、江戸時代には、武田家の旧家臣(小人頭)が核となって八王子千人同心が成立し、甲州道中の警備と治安維持を担いました。



富士吉田

江戸時代中期以降、庶民の間で流行した富士講は、八王子の高尾山を参詣した後に富士山へ参るのが慣例でした。

小田原 (姉妹都市)

戦国時代、豊臣秀吉の小田原合戦の際に、北条氏照は八王子城に重臣を置いて守らせ、兄氏政と甥氏直と共に小田原城に籠城しました。

小田原市とは、平成29年(2017年)に本市が市制100周年を迎えることを機に、戦国時代に広く関東を治めていた北条氏のゆかりから平成28年(2016年)に姉妹都市の盟約を結びました。



歴史へのアクセス

まちからまちへ、人やものを運び、文化を運び、時代を動かしていった道。八王子を通る様々な「道」には、魅力ある歴史があります。

日光（姉妹都市）

江戸時代、八王子千人同心には、甲州道中の警備以外に日光東照宮の警護という新たな任務が与えられました。日光勤番または日光火の番役と呼ばれるこの任務のため、平の渡しから多摩川を渡り、日光脇街道を通っていきました。

日光市とは、このときの縁で、昭和49年（1974年）に姉妹都市の盟約を結びました。

江戸

江戸時代、甲州道中沿いは観光スポットになっていたようで、松尾芭蕉や葛飾北斎、歌川広重が往来したほか、十返舎一九が『甲州道中記』を、仮名垣魯文が『身延参詣甲州道中膝栗毛』で道中の様子を書き残しています。また、新茶を宇治から江戸の将軍に献上するため茶壺を積んだ荷駄が甲州道中を通りました。



横浜

幕末から明治時代、横浜開港を機に、各地の生糸の集積地であった八王子から浜街道（絹の道）を経て横浜へと運ばれていきました。

また、横浜からは多くの西洋の文化が八王子に入ってきました。



鎌倉

鎌倉時代初期、和田合戦が原因となり没落した横山党に代わって横山荘（現八王子市周辺）を支配したのが鎌倉幕府の政所別当大江広元です。広元の次男時広が出羽国置賜郡長井荘（現山形県米沢市・長井市周辺）の地頭職に任じられ、長井氏を称します。その後、長井氏の一族が八王子に土着し、戦国時代まで続きました。



日光脇街道

古川越道

甲州道中（甲州街道）

御殿峠古道

浜街道（絹の道）

八王子道

鎌倉街道山の根の道

滝山城跡

まちとまちをつなぐ鉄道

甲州街道や浜街道など、古くから使われてきた道に沿うようにして、多くの鉄道が敷設され、八王子は商工業のまちとして、また交通の要衝として発展していきました。



中央本線



明治22年(1889年)に、甲武鉄道が八王子駅を開業し、新宿―八王子間が開通しました。山梨県からは、石材・生糸・薪炭などの特産物が八王子を通過して東京に輸送され、八王子から山梨へ米・酒・醤油・味噌などが送られていきました。

横浜線



明治41年(1908年)に八王子や甲信地方で生産された生糸を横浜へ輸送することを目的として、横浜鉄道が開業し、八王子―東神奈川間が開通しました。

八高線



昭和6年(1931年)に八高南線が開業し、昭和9年(1934年)に八高北線の小川町―寄居間の開通をもって八王子―倉賀野間が全線開通しました。群馬への貨物には五日市のセメント・肥料・山梨県産のブドウなどが積み、逆に八王子への貨物には輸出用ユリネ・生糸・小麦・製糸原料などが積み込まれていました。

高尾登山電鉄



昭和2年(1927年)に、清滝―高尾山間のケーブルカーが開業しました。開業当初は、急勾配を往復するケーブルカー自体の物珍しさと、武蔵陵墓地と合わせた高尾山への参拝者が増えて活況を呈しました。現在も高尾山へ参拝者や登山者を運ぶ路線として利用されています。



京王線

大正14年(1925年)に、玉南電気鉄道(当時)により、府中―東八王子(現京王八王子)間が開業されました。その後、昭和元年(1926年)に、新宿―府中間を結んでいた京王電気軌道が玉南電気鉄道を合併しました。



京王相模原線

大正5年(1916年)に調布―多摩川原間で京王電気軌道が多摩川で採取された砂利を都心に運搬するための鉄道として開業した多摩川原支線が元になっています。その後、多摩ニュータウンの建設を契機に、線路を西へと延伸させました。



京王高尾線

京王高尾線は、昭和6年(1931年)に武蔵陵墓地への参拝路線として北野―御陵前間で開業した御陵線が元です。第二次世界大戦中に休止しましたが、昭和42年(1967年)に京王帝都電鉄が路線の一部を復活させ、北野―高尾山口間が開業し、高尾山などを訪れる人々を運ぶ路線として利用されています。



多摩都市モノレール

昭和61年(1986年)に多摩都市モノレール株式会社が設立され、平成12年(2000年)に上北台―多摩センター間が開通しました。市内には「松が谷」「大塚・帝京大学」「中央大学・明星大学」の3駅が開業しました。

かつて市内を走っていた路面電車 武蔵中央電気鉄道

昭和初期に八王子市街と高尾山を結んだ路面電車です。昭和7年(1932年)には、東八王子・八王子駅前―高尾橋(高尾山の入口)間が開通し、市民のみならず、登山客の足として利用されていました。しかし、経営状況の悪化に伴い、京王電気軌道(現京王電鉄)に買収され、戦時色が濃くなる中で運転を休止しました。線路の敷石は、今でも並木町の長安寺などに残っています。昭和戦前期の一時代、八王子市街地の風景を彩った路面電車です。



八王子市街(八日町)



高尾山麓付近

主な構成文化財

① 絹の道



市史

〔鍾水〕

幕末期から明治中期まで、八王子から横浜に輸出用生糸を運んでいた道です。平成8年(1996年)に文化庁「歴史の道百選」に選定されました。

② 日光脇街道



〔尾崎町〕

千人同心が日光東照宮火の番勤務のために往来した街道で、八王子の千人町と日光東照宮を結んだ街道です。

③ 甲州街道イチョウ並木



市記

〔並木町ほか〕

昭和2年(1927年)の大正天皇陵完成に伴い、昭和4年(1929年)に道路改修された際に、宮内省(現宮内庁)によって植えられました。イチョウは、市制60周年を記念して、昭和51年(1976年)に「市の木」に制定されました。

④ 口留番所跡



市史

〔上恩方町〕

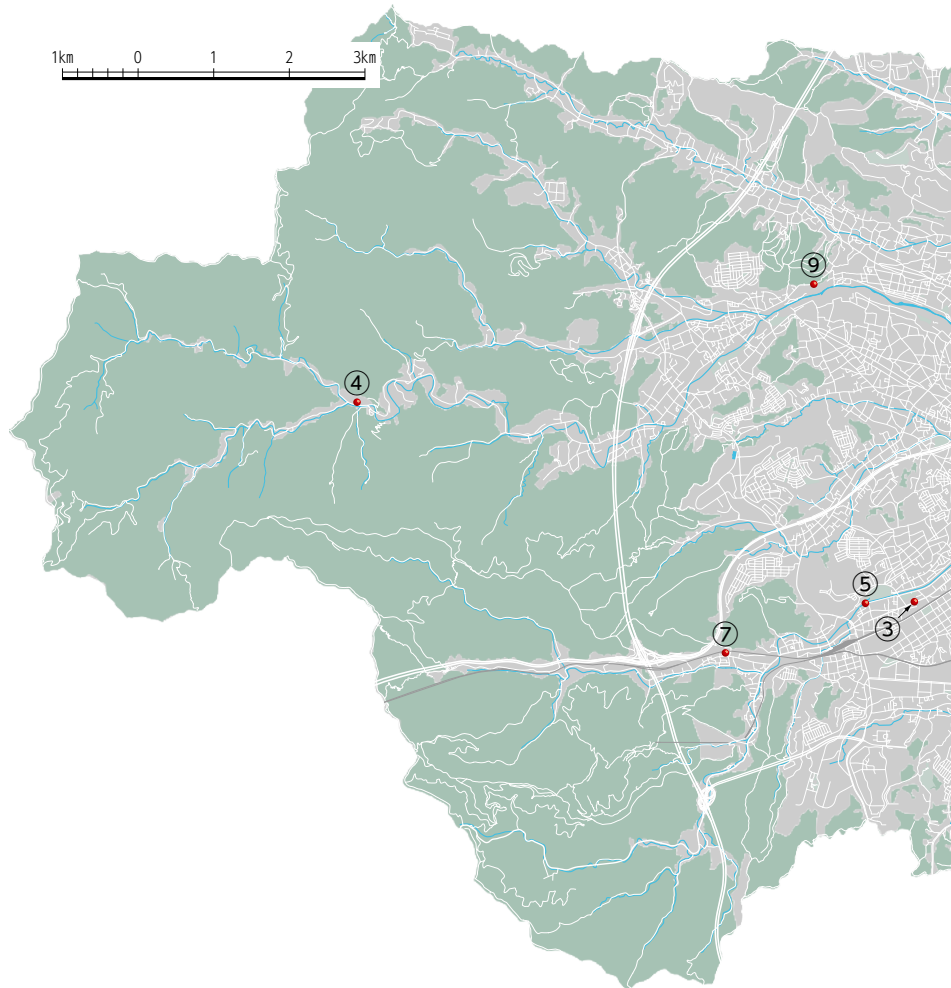
甲州街道の裏街道にあたる佐野川往還の分岐点、高留にあった番所跡です。口留番所とは、江戸時代、交通の要地に人や物資の出入りを検査するために設けられた見張り所です。明治2年(1869年)に廃止されるまで村持ちで管理していました。現在でも付近を「関場」と称しています。

⑤ 鎌倉街道山の根の道(古道橋)



〔東浅川町〕

鎌倉街道の主要な道筋は上ノ道、中ノ道、下ノ道の3本でしたが、そのほかにも多数の枝道、間道があり、山の根の道もそうした道でした。鎌倉街道山の根の道は秩父から青梅、五日市、八王子など、山辺を縫う様に走る道でした。武蔵陵墓地付近に架かる古道橋は、かつての鎌倉街道の跡です。



国史：国指定史跡

市史：市指定史跡

市記：市指定天然記念物

※①②⑤⑩の地名は掲載写真の場所を示しています



⑥古川越道(平の渡し跡)



〔平町〕

古川越道は、八王子と武蔵村山三ツ木、さらに川越を結ぶ道でした。道中には、江戸時代に多摩川の渡し場として機能していた「平の渡し」がありました。

⑦小仏関跡



国史

〔裏高尾町〕

北条氏照が武蔵国と相模国境の要衝として小仏峠に築いたのがはじまりと言われています。天正8年(1580年)に駒木野に移ったといわれ、その後、現在の位置に整備されたといわれています。

⑧長安寺参道の敷石



〔並木町〕

長安寺の参道にある敷石は、昭和4年(1929年)から10年間、市内を走っていた武蔵中央電気鉄道の路面電車の敷石を再利用しています。

⑨さげ坂



〔川口町、西寺方町〕

近世期には、川口から恩方、高尾方面への通行に利用されていました。川口側の入り口には、庚申塔や第六天王という神奈川県地域信仰のいわれを持つ石碑が立っています。

⑩小野路街道



〔北野町〕

八王子と小野路(現町田市)を結ぶ古道です。古くは猿丸峠や猿山通りとも呼ばれ、峠には馬や牛に水を飲ませていた水飲み場があり、当時のおもかげを残しています。また、JR横浜線にある「小野路街道踏切」という名にも、古道の記憶が残されています。

文化財の保存・活用事例

伝承のたまてばこ ～多摩伝統文化フェスティバル～

八王子駅周辺の街なかを舞台に、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、八王子市、公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団の主催で、八王子や多摩地域に伝わる伝統文化・芸能の魅力を気軽に鑑賞・体験できる事業として開催しています。

平成30年度(2018年度)に行われた「古道が紡いだ八王子の物語」は、昔の八王子の姿と、先人たちが歩いてきた数々の「道」の物語で構成され、【縄文時代】山の民・海の民 縄文街道 大交流時代、【飛鳥・奈良・平安時代】国づくり国道ネットワーク、【鎌倉時代】いざ鎌倉！もののふ(武士)の時代の道づくり、【戦国時代】群雄割拠！戦国の武士たち 城づくりのものがたり、【江戸時代】家康の新しいまちづくり にぎわう宿場通り、【明治～現代】生糸と織物 荷車から鉄道へ 人とモノの新・創世記の全6話を上演しました。また、語りの中で、映像と音楽、そして道に見立てた糸を紡ぐダンスパフォーマンスが披露されました。



日光千人同心街道四十里ジャーニーラン

八王子市千人町から^{はいじま}拜島宿(昭島市)、^{さかど}坂戸宿(坂戸市)、^{たてばやし}館林宿(館林市)へと北上し、^{てんみょう}天明宿(佐野市)で例幣使街道、^{れいへいし}楡木宿(鹿沼市)で壬生街道、^{にれぎ}今市宿で日光街道に合流して東照宮に至る40里(約160キロメートル)の道筋。この千人同心街道(別称日光脇街道、日光裏街道、日光火の番街道)と呼ばれる道は、承応元年(1652年)から慶応4年(1868年)までの間に、千人同心が日光勤番のため1000回を超える往来をしたといわれています。

歴史の舞台から彼らの姿が消えて約150年の時が流れた今、その史実を追体験する第1回のランニングイベント(主催：NPO法人スポーツエイド・ジャパン)が令和元年(2019年)6月15日・16日に開催されました。



はちおうじ物語 其の三

中世の武士たちと「まちづくり」の礎



武士たちが八王子のまちに

遺したものは？

江戸時代以降、多摩地域における代表的な商業都市として発展した八王子。その発展の礎は、中世以降に八王子で活躍した武士たちによって築かれたといえるでしょう。武士たちが、覇権を争った戦乱の中で、八王子のまちづくりの礎として遺したものを探ってみましょう。

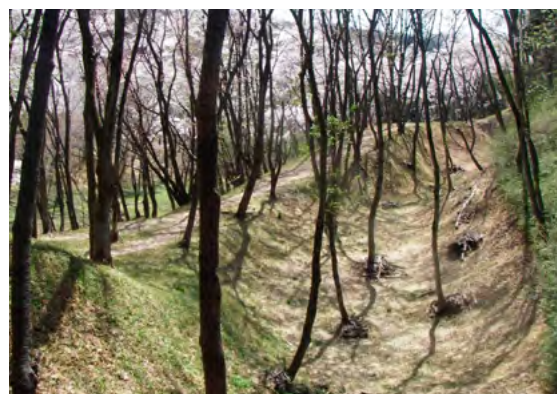


八王子城跡 御主殿庭園状遺構

八王子には、八王子城、滝山城をはじめ、初沢城、片倉城、浄福寺城、高月城など、多くの城が築られました。横山党、長井氏、梶原氏などの武士、武蔵守護代をつとめた大石氏、戦国大名の北条氏などが、平安時代末期から戦国時代にかけて、八王子を勢力範囲にして活躍しました。彼らは、乱世の栄枯盛衰の中で、防衛拠点として、そして生活拠点としての城館を八王子に築きました。

関東の覇者となった北条氏康の三男氏照は、小田原北条氏の支城として最大級の城郭を深沢山に築きます。ここには守護神として八王子権現を祀っており、八王子城の名はこれに由来するといわれています。

滝山城下には、宿が設けられ、城下町が整備されていたようです。氏照が居城を八王子城に移す際には、城下町も移し、難攻不落の堅城を築城するとともに、町や宿などの都市基盤の構築にも力を入れていました。八王子城の城下町は、落城後に現在の八王子市街地に移され、八王子宿がつくられました。



滝山城跡 池跡南側の堀



八王子いちょう祭り 甲冑隊

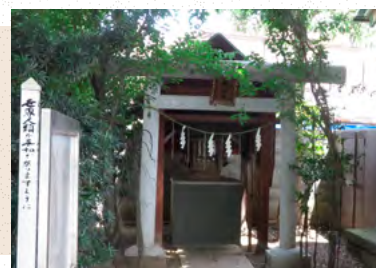
八王子に登場した 武士たち

平安時代末期から戦国時代にかけて、横山党をはじめとする武士たちが八王子を拠点にして活躍しました。彼らは戦乱下で盛衰を繰り返しながらも、城館を築き、集落や交通路を整備していき、やがて「八日市場」のような経済拠点が形成されました。中世の武士たちが築いたまちづくりの礎は、江戸時代の大久保長安による宿場づくりに引き継がれ、現在の商業都市の発展につながっていきました。

10世紀

横山党…万葉集の地名「横山」を称する武士団

- ・八王子にはじめて現れた武士団で、武蔵七党の一つ
- ・船木田荘(横山荘)の成立に関与
- ・鎌倉時代初期に起きた和田合戦で和田方に味方し没落



横山神社 (八幡八雲神社内)

13世紀

大江流長井氏…「横山」支配の継承者

- ・鎌倉幕府政所別当大江広元の流れを汲む武家
- ・大江師親が廣園寺を創建
- ・片倉城を築城したと伝えられている



廣園寺

14世紀

梶原氏…横河郷の開発と八幡勧請

- ・鎌倉御家人梶原景時の末裔で室町幕府奉公衆の一族
- ・八幡神社を勧請して「梶原杉」を残す
- ・後の「八幡宿」名称のルーツか？



八幡神社 (元八王子町)

15世紀

大石氏…戦乱下に進出した新支配者

- ・関東管領・武蔵守護山内上杉氏の重臣
- ・浄福寺城、高月城、滝山城を築城したといわれている
- ・下原鍛冶を招致したといわれている

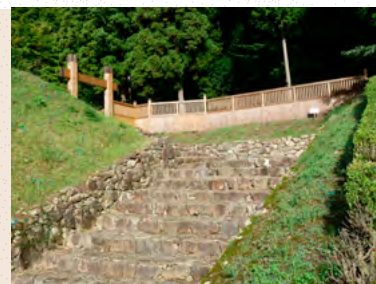


浄福寺城跡

16世紀

北条氏照…八王子「三宿」の創始者

- ・戦国大名北条氏康の三男
- ・江戸時代以降の宿場町の基盤となった横山・八日市・八幡の三宿を滝山城下・八王子城下に築いたといわれている
- ・市名の由来となる八王子権現を八王子城の守護神とした



八王子城跡



北条氏照ってどんな人？

北条氏康の三男で小田原北条氏第4代当主氏政の弟。北条氏一族として軍事・外交面で活躍、勢力拡大に貢献しました。その一方で笛の名手であったとも伝えられ、「月夜峰」の地で家臣とともに宴を催し、獅子舞を見物したとの伝承が残されています。

下原鍛冶 ～武州・下原刀～

永正元年(1504年)の長井氏滅亡後、浄福寺城(下恩方町)に大石氏が拠点を構え、城下には「上宿」という町場(城下町)が形成されたと考えられています。この城下町には、刀鍛冶をはじめとする職人が招致されており、城の北東にあたる^{へんな}辺名(下恩方町)は「下原刀鍛冶発祥の地」(市指定史跡)として現在に伝わっています。

相州鍛冶の流れを汲む初代山本周重が鎌倉から移住し、のちに下原に居住して「下原鍛冶」と呼称されました。この下原鍛冶が製作した刀や槍などを下原刀といいます。初代周重が当地に移住してきた時期は、16世紀前半のことであろうと推測されています。二代周重は、のちに康重と改名しており、北条氏康から「康」の一字が与えられたと考えられます。周重の次男照重は、住居を横川村に移して別家を立て、その名は北条氏照から「照」を与えられたようです。八王子城が落城した後も、下原鍛冶は徳川氏から北条氏以来の権利を認められ、幕末まで続きました。



下原刀の「脇指(武州住照広)」(市指定有形文化財〈刀剣〉)

北条氏照が居城とした 滝山城と八王子城

滝山城

滝山城は、多摩川と秋川の合流点の南側に広がる加住丘陵上に築かれた全国でも有数の中世城郭です。もともと大石氏の居城で、大永元年(1521年)に大石定重によって築かれたといわれています。その後、北条氏が関東に進出すると、大石氏の養子となった北条氏照が城主となりました。現在見られる大きな空堀や馬出は、氏照時代に大改修されたものです。永禄12年(1569年)には武田信玄の攻撃を受け、二の丸まで攻められています。その後、豊臣秀吉による天下統一の機運が高まる中、氏照は新たに八王子城を築き、滝山城から拠点を移しました。



滝山城跡（国指定史跡）



八王子城跡（国指定史跡）

八王子城

八王子城は、戦国時代の山城で、関東地方を領していた北条氏最大の支城です。標高460メートルの眺望のよい深沢山の頂に本丸が築かれています。築城の時期ははっきりしていませんが、天正10~15年(1582~1587年)ごろに、北条氏照によって築城されたといわれています。しかし、天下統一を目指す豊臣秀吉と北条氏は衝突し、天正18年(1590年)6月23日、秀吉方の武将である前田利家・上杉景勝の軍勢によって攻められました。難攻不落の堅城といわれていましたが、兵力に勝る豊臣方の攻撃は苛烈を極め、1日で落城しました。城郭の規模と豊富な出土遺物から、戦国時代の名城として知られています。

北条氏照による 戦国時代のまちづくり

由井領内における伝馬^{てんま}の導入と三宿

氏照が支配した由井領内での伝馬関係史料が残っています。北条氏が平井郷(現日の出町)の伝馬奉行宛に「伝馬定」と題する朱印状を出して、伝馬の提供を命じました。伝馬とは、人や物資を、街道上に設けられた宿(宿場、宿駅)から次の宿まで馬で運び届けることです。北条氏は領国全体の主要な街道沿いの城下町などの町場を一定間隔で宿に指定し、伝馬を負担させました。負担するのは基本的にはその地で店や運送を営む町人などでしたが、伝馬を提供する責任者は問屋でした。そのため、支城主は宿の有力な商人に問屋の権利を認め、伝馬制度を維持し、また、宿内の喧嘩・紛争などの解決にもあたらせていました。さらに街道上には市が開設されました。

滝山城の城下には横山・八日市・八幡の城下町がありました。永禄12年(1569年)10月24日の書状では、氏照が滝山城に襲来した武田軍に対し、「宿三口」へ軍勢を出して戦ったと書かれています。この「宿」は当城下町を指し、「横山宿」「八日市宿」のように呼ばれていたことがわかります。この三宿の名称は八王子城への移転後も継承されています。

八王子城のくらし

八王子城跡の御主殿跡は、落城後に徳川氏の直轄領となり、明治時代以降は国有林であったことから、現在まであまり人の手が入らず、落城当時のままの状態で保存され、遺構の状態も良好でした。そのため、大規模な礎石建物跡などの遺構が発掘され、国産の陶器や中国製磁器類をはじめとする多くの遺物が出土しました。中でもベネチア産のレースガラス器は、全国で唯一、八王子城跡でしか出土されていない貴重なものです。また、平成25年(2013年)の調査では、池を伴う庭園遺構が確認されました。茶道具、香道具などの品々もあり、これらの出土品から、北条氏の文化水準の高さをうかがい知ることができます。



青花皿

(すべて八王子城跡から出土)



梅瓶



レースガラス器



レースガラス器レプリカ



香炉



天目碗



青花碗

主な構成文化財

①八王子城跡



国史

〔元八王子町三丁目ほか〕

北条氏照により築城された小田原北条氏最大級の支城です。現在は、戦国末期の石垣をはじめとする遺構が復元・整備され、御主殿や御主殿入口部の虎口も整備されています。平成18年(2006年)に、日本100名城に選定されました。

②滝山城跡



国史

〔高月町ほか〕

大石氏が居城した後、北条氏照が入城し、由井領支配の拠点となりました。国内有数の中世城郭で、空堀・土塁・井戸などの遺構が良好に残存しています。平成29年(2017年)に続日本100名城に選定されました。

④大石氏居館跡



市史

〔下柚木〕

「大石氏居館跡」として市史跡に指定されている永林寺の開基は、滝山城主大石定久で、開山は定久の叔父長純と伝わっています。定久は氏照に家督を譲った後、この地に隠居して真月齋と名乗ったといわれています。なお、『新編武蔵風土記稿』では「由木氏邸跡」と紹介されています。

③大善寺



〔大谷町〕

大善寺は、北条氏照が讀牛秀よみうしゅうに帰依して開基となり、永禄5年(1562年)滝山城下に創建しました。北条氏照が八王子城へ移った際にも共に移転したといわれています。八王子城落城の際に寺も焼失、大横町へ移転しました。その後、大和田町へ移転し、昭和56年(1981年)大谷町に本堂が完成しました。

⑤横山党根拠地



都日

〔元横山町二丁目〕

横山党は、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけて存在した武蔵国の最大規模の武士団です。八幡八雲神社境内付近一帯が横山党根拠地であったと考えられ、横山党の始祖横山義孝を祀った横山神社があります。

⑥広園寺境域



都史

〔山田町〕

甲斐国向嶽寺こうがくじ(山梨県甲州市)の峻翁山しゅんのおうさんが開山、大江師親が開基といわれている臨済宗の寺です。参道の近くの「枅形」に、大江氏の屋敷があったと伝わっています。八王子城攻めの戦火や元禄時代の火災によって堂舎が失われましたが、江戸時代中期に復興された建物が現存しています。

国史：国指定史跡

都史：都指定史跡

市史：市指定史跡

都旧：都指定旧跡



⑦ 片倉城跡



都史

〔片倉町〕

室町時代、大江流長井氏が居城していたといわれています。小田原道(国道16号)と北野街道を押える要衝です。空堀などの名残が見られます。現在は、片倉城跡公園となっています。

⑧ 八王子神社



〔元八王子町三丁目〕

八王子神社が建立されている深沢山に北条氏照が八王子城を築いた際、神社に祀られる八王子権現を城の守護神としたといわれています。また、現在の市名の起源は、ここに由来しています。

⑨ 相即寺



〔泉町〕

八王子城の北東に位置することから、かつては城の鬼門除けとしての役割を担っていたといわれています。同寺の地蔵堂には、八王子城落城の時に戦死した者たちを弔うために作られた地蔵が祀られています。

⑩ 宗関寺



〔元八王子町三丁目〕

永禄7年(1564年)にト山舜悦が開山し、北条氏照が開基となって建立されたといわれています。天正18年(1590年)の八王子城落城の際に本堂などの建物は焼け落ちましたが、氏照百回忌の折に新築され、氏照の法名から「宗関寺」と命名されました。

⑪ 浄福寺城跡(新城跡)



市史

〔下恩方町〕

案下城、松竹城、干手山城、新城ともいい、大石氏が案下道(陣馬街道)を押さえるため16世紀前半に居城したと考えられています。

⑫ 八王子城跡御主殿出土品



平成4～5年度(1992～1993年度)に行われた発掘調査では約7万点(2436個体)の遺物が出土しました。出土品の大半は中国製の皿でした。この他に国産の皿や碗、甕、建物に使われた釘や火縄銃の弾や弾の鋳型など多種多様な遺物が出土し、戦国時代の生活や文化、城での戦いの様相がうかがえます。

文化財の保存・活用事例

八王子城跡ガイダンス施設

八王子城の歴史や城主北条氏照の人物像などを、遺物やパネル、模型等で紹介しています。また、八王子城とその時代を解説した映像が見られる、ガイダンスシアターもあります。



子ども手作り甲冑教室

毎年、八王子城跡ガイダンス施設で、子どもたちがオリジナルの甲冑を作りながら、甲冑の仕組みや戦国時代の八王子について学ぶ「子ども手作り甲冑教室」を、NPO法人八王子城跡三ツ鱗会の協力で開催しています。同法人は、姉妹都市である小田原市や寄居町との交流を重ねながら八王子城の歴史を今に伝える活動を行っています。

滝山城・城攻めガイド ～滝山合戦450年記念～

滝山城主北条氏照は、永禄12年(1569年)に武田信玄と滝山城で攻防戦を繰り広げました。令和元年(2019年)は、この攻防戦から450年の節目の年にあたり、これを記念して同年10月には「滝山城・城攻めガイド(主催：NPO法人滝山城跡群・自然と歴史を守る会)」が開催されました。同法人は、滝山城跡の保存・活用の推進団体で、遺構景観の回復作業やガイドツアーなど様々な活動を行っています。



元八王子北条氏照まつり

八王子城を築城した「北条氏照」をたたえるイベントとして、元八王子地区町会自治会連合会が主催となり、毎年開催されています。北条氏照まつりのメインとなる「北条氏照まつり武者行列パレード」は、星槎国際高等学校から市立元八王子小学校までの高尾街道沿いを武者隊などが練り歩きます。

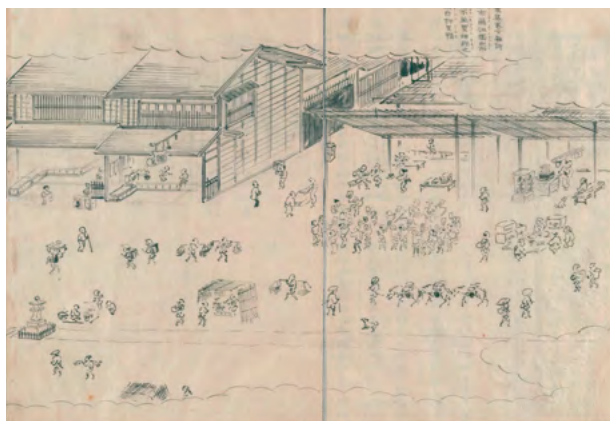
はちおうじ物語 其の四

八王子宿と千人同心

千人同心はどのような文化を育んだ？

現在の中心市街地の基盤となった、江戸時代の八王子十五宿。その西方には、甲州口の守りなどのために「千人同心」が配置されていました。千人同心は、軍役を務め、治安維持や日光火の番などで活躍した一方で、数々の文化的功績も残しました。八王子十五宿の始まりから、千人同心の活躍と文化的な功績を追ってみましょう。

千人同心の連絡網「番組合之縮図」



『八王子名勝志』にみえる甲州道中と八王子宿



千人頭の家に伝わる兜(市指定有形文化財(工芸品))

徳川氏の代官頭大久保長安は、北条氏照が八王子城下に築いていた城下町、横山・八日市・八幡の三宿と領民を現在の中心市街地に移して、新たに八王子宿として整備しました。

八王子宿の西方(現千人町)には、武田氏の旧臣などからなる千人同心が置かれました。千人同心は、徳川家康の江戸入府にともない、当初は甲州との国境警備や八王子城落城後の地域の治安回復などにあたりましたが、その後、日光東照宮とその周辺の火の番をする日光勤番を公務として幕末まで担いました。

常に国内外の最新の知識と文化に通じていた千人同心からは、地理学や蘭学に優れた文化人を多く輩出しました。また、横浜港の開港前に、国事に関心を抱いていた千人同心が海防にかかわる意見書を徳川幕府に提出しました。開港後は、全国各地への千人同心の派遣が開始され、派遣地での情報収集が行われました。幕府の解体後、千人同心の多くは帰農して、八王子周辺地域に根付いていきました。

発展を続ける現在の八王子の学問や文化には、文化的な側面も持ち合わせていた千人同心の気風が受け継がれているのかもしれません。

八王子宿のはじまり

天正18年(1590年)、北条氏照の居城八王子城は、豊臣秀吉軍の上杉景勝・前田利家の軍勢に攻められ、ついに落城しました。その後、現在の八王子市街地である横山の地に新しい町づくりがはじめられました。それは中世から近世への、新しい時代の幕開けでもありました。

大久保長安らの指揮のもと、浅川の河川が管理され、甲州道中が整備されました。甲州道中の宿として東から横山・八日市・八幡の3宿が元八王子から移されました。その後、宿は15に増え、さらには寺院や神社も置かれ、「八王子十五宿」が形成されていきました。八王子宿の西方には、江戸の西の防衛拠点として千人同心が配置されました。



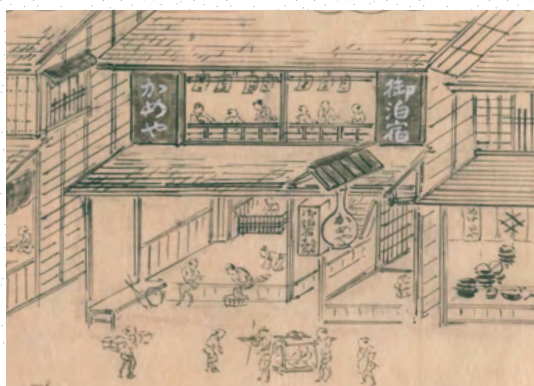
文政5年(1822年)ごろに描かれた八王子宿全景
(『新編武蔵風土記稿』)

八王子宿のにぎわい



時の鐘(市指定有形文化財(工芸品))

横山宿と八日市宿には六斎市(月^{ろくさいいち}に6回行われる市)が開かれ、八王子宿は、市を中心とした地域経済の中心都市として発展しました。市の様子は『桑都日記』にも「桑都朝市」として紹介されています。また、甲州道中を通して高尾山に参詣し、小仏峠を越えて富士山に向かった富士講の道者や庶民の参詣の旅人にも利用されました。徳利^{とくり}の看板で有名な「かめや」などの旅籠^{はたご}もこうした中で誕生しました。元禄時代になると、経済的にも文化的にも充実し、宿場の人々に時刻を知らせるための時の鐘がつけられました。



旅籠の「かめや」(『八王子名勝志』)



『桑都日記稿本』に描かれた「桑都朝市」
(都指定有形文化財(古文書))

八王子宿を整備した 大久保長安

小門宿(現小門町)には、代官頭大久保長安の陣屋が設けられ、関東十八代官を指揮して、八王子だけでなく関東幕領の統治を行いました。陣屋には牢屋もあり、警察の役割も果たしました。産千代稻荷神社がその跡地と言われています。また、長安は交通網を整備し、一里塚を設けたともいわれています。甲州道中の一里塚のうち、新町の竹の花公園に竹の鼻一里塚跡が残っています。そのほか、治水事業も手掛け、度々氾濫して大きな被害を出していた浅川には堤防が築かれました。この堤防は、千人町・日吉町から新町の辺りまで続く大規模なものでした。大久保長安の官途「石見守」にちなんで「石見土手」としてその一部が残されています。



大久保長安像(新潟県佐渡市大安寺所蔵)



産千代稻荷神社(大久保石見守長安陣屋跡(市指定史跡))

千人同心たちの心の支え 武田家のお姫様 松姫

松姫は、永禄4年(1561年)に甲斐国の古府中、躑躅ヶ崎^{つづきがさき}の屋敷で生まれました。父は、戦国時代の武将、武田信玄です。天正元年(1573年)に武田信玄が亡くなると、織田信長による武田家の領地への侵攻がはじまりました。武田家が滅亡する天正10年(1582年)、兄仁科盛信^{にしまりのぶ}の3歳になる娘小督^{こくす}を連れて高遠城を出発し、八王子まで逃れてきました。この逃避行の際に、心源院(現下恩方町)で尼となり、8年間の修行を積み、天正18年(1590年)、御所水(現台町)に移り住みました。元和2年(1616年)に亡くなるまで、尼として生活を送りました。墓地は没後132年目にあたる延享5年(1748年)に千人頭や同心たちが玉垣を寄進して現在のような姿になりました。松姫は没後も千人同心たちの心の支えとして生き続けました。



木造松姫坐像(市指定有形文化財(彫刻))



松姫尼公墓(市指定史跡)

千人同心とは

千人同心を率いた千人頭の前身は武田家家臣の小人頭です。武田氏の滅亡後、徳川家臣団に組み込まれました。家康が関東に入国し、新たな宿の建設が始まると、元八王子に居住していた小人頭と配下の小人は、現在の千人町に移住しました。八王子宿の整備にあたった代官頭の大久保長安は警備強化のため、小人を千人体制とし、ここに千人同心が成立しました。

彼らは八王子とその周辺に居住し、通常は農耕を営み有事に備えました。徳川幕府が安定すると、日光東照宮を火災から守る火の番の役割や蝦夷地の防衛と開拓を担い、以後幕府崩壊までその公務を全うしました。



「長槍水打」の図(『桑都日記稿本』、都指定有形文化財<古文書>)



千人頭の具足(市指定有形文化財<工芸品>)

村々とのつながり

八王子宿やその周辺の村々に点在する千人同心たちは、「番組合之縮図」をもとに、^{かいじょう}廻状の伝達などで連絡を取り合っていたようです。この「番組合之縮図」は、現在の市域のもととなる10の市町村の前身である近世の村々が、千人同心を通して線(連絡網)でつながっています。現在の市域は、千人同心の連絡網からも、昔から一つの地域圏であったことが分かります。



番組合之縮図(嘉永7年<1854年>)

千人同心と学問

新編武蔵風土記稿



文化6年(1809年)千人頭原半左衛門は、幕府から地誌搜索の命を受けて、^{うさだもろしん}植田孟縉・^{しおのてきさい}塩野適斎などの組頭とともに、周辺村々を調査し編集しました。

武蔵名勝図会



千人同心組頭の植田孟縉が『新編武蔵風土記稿』での地誌搜索調査と併行して著しました。高尾山などの名勝地が紹介されています。

両半球世界図



千人同心(志村組)組頭の^{まつもとときぞう}松本斗機蔵が所有していた世界図。「新訂萬国全図」の写です。斗機蔵の海外への強い関心がうかがえます。

千人同心と芸術

秋山佐蔵の漢詩



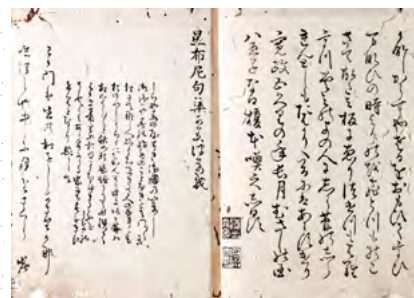
千人同心で蘭方医の秋山佐蔵が、関心を持った出来事などを漢詩で詠んだもの。漢詩人の川本衡山の詩会で披露したとおもわれる作品もあります。

日光山志の挿絵



植田孟縉著『日光山志』に、塩野適斎の義弟で千人同心の河西愛貴が描いた「肉蓯蓉」(生薬の一種)という挿絵が載っています。河西はこのほかにも『新編武蔵風土記稿』や『桑都日記』の挿絵も描いています。

星布尼句集



女性俳人の^{せいふ}松原庵星布は、千人同心の娘であった継母の影響で俳諧をはじめたといわれ、文化11年(1814年)に83歳でこの世を去るまで松原庵の宗匠として句合を主催するとともに、句集を刊行しました。

主な構成文化財

①大久保石見守長安陣屋跡



市史

〔小門町〕

大久保長安は、八王子城落城後に八王子宿の整備に関わり、現在の小門町から上野町に陣屋を置いて、関東十八代官の頭として関東幕領の統治を行いました。

②石見土手



市史

〔千人町二丁目〕

大久保長安が浅川の治水のために現在の並木町から元本郷町にかけて築いた町囲いの堤防です。長安の官途名「石見守」から「石見土手」と呼ばれています。現在は宗格院本堂の北側境内に、石積みを残しています。

③宗格院



〔千人町二丁目〕

武田家臣山本土佐忠玄の子、价州良天が文禄2年(1593年)に開いた寺院です。千人頭として八王子に移り住んだ父親の供養のために建てられました。千人同心組頭の松本斗機蔵墓(都指定旧跡)があります。現在は、「八王子八福神めぐり」の一つになっています。

④追分道標



〔追分町〕

文化8年(1811年)、江戸の足袋屋清八が、高尾山に銅製五重塔を奉納した記念に、江戸から高尾山までの甲州道中の新宿・八王子・高尾山麓の3か所に立てた道標の一つです。甲州街道と陣馬街道の分岐点に建てられています。

⑤新町竹の鼻一里塚跡



市史

〔新町〕

八王子宿の東の入口に位置し、江戸から12里にあたるこの地に一里塚が建てられました。現在は付近で鍵の手に曲がる道筋が、昔の面影をわずかに残しています。

⑥小谷田子寅の碑



市史

〔下恩方町〕

小谷田子寅は千人同心で、特に医学に励み、薬を乞うもの、診断を求めるものがあつたため、民衆に慕われたといわれています。子寅の善徳を称え、同じ千人同心である塩野適斎が撰文し、植田孟縉が揮毫・刻字した貴重な碑です。



市有：市指定有形文化財

市史：市指定史跡



⑦時の鐘



市有 工芸品

〔上野町〕

この鐘は、元禄12年(1699年)八日市名主新野与五右衛門を大旦那として、千人頭、千人同心をはじめ、近郷村々の協力により鑄造されたものです。約170年の間、八王子十五宿の人々に時を告げてきました。

⑧千人頭の具足



市有 工芸品

八王子千人同心の組頭を務めていた旧家に伝来したもので、江戸時代中期のものと推定されています。現在は八王子市郷土資料館に収蔵されています。

⑨旧甲州街道



〔東浅川町〕

東浅川町には、旧甲州街道に沿って千人同心家などの黒い板塀が残り、江戸時代の甲州道中の面影があります。

⑩松姫尼公墓



市史

〔台町三丁目〕

信松院にある松姫の墓所は、松姫の死後132年目にあたる延享5年(1748年)に千人頭たちが玉垣を寄進して現在のような姿になりました。

⑪八王子千人同心屋敷跡記念碑



〔追分町〕

甲州街道の追分町交差点を陣馬街道に入っていくところにあります。この辺りから甲州街道に沿って西の方に千人頭や同心の屋敷が建ち並んでいました。現在、この地に屋敷は残っていませんが、江戸東京たてもの園(小金井市)に「八王子千人同心組頭の家」が移築復元されています。

⑫市守神社



市史

〔横山町〕

天正18年(1590年)に、八王子開府の功労者である長田作左衛門によって、市の商人の守護神として祀られたのが始まりです。江戸時代中期には、大鳥神社も合祀され、「お酉さま」「酉の市」と呼ばれる大鳥祭が現在も行われています。

文化財の保存・活用事例

長安祭

大久保長安が、この地に陣屋を構え、稲荷社を創建したことに由来し、毎年4月に、産千代稲荷神社にて大久保長安の慰霊祭となる「長安祭」が開催されています。このお祭りには、大久保長安研究や「はちおうじ大久保長安の伝説の地に行く」マップ(作成はとんとんむかしの会)を公開している大久保長安の会が協力しています。



北海道白糠町小学生交流事業

北海道^{しらぬかちょう}白糠町は、江戸時代に千人同心が警備と開拓のために入植したゆかりの地です。白糠町と八王子市の小学生が、それぞれのまちの歴史や文化を学ぶとともに隔年でお互いの地を訪問し、様々な体験活動を行っています。

平成11年(1999年)に白糠町の小学生が八王子市を訪問したことで交流が始まり、令和元年度(2019年度)で21回目となります。

(右写真：蝦夷地開拓を行った千人頭原胤敦のお墓参りの様子)



はちおうじ物語 其の五

桑都八王子は織物のまち



なぜ、八王子は“桑都”と呼ばれるようになった？

八王子は、古くから養蚕が盛んな地域として知られ、江戸時代中期ごろから生糸や絹織物が盛んに商売されていました。八王子の風土の中で育まれた産業のルーツを探り、現在につながる「ものづくり」の原点を見ていきましょう。

繭から糸が紡がれる

八王子が桑都^{そうと}と呼ばれるようになった由縁は、西行が詠んだという短歌「浅川を渡れば 富士の雪白く 桑の都に青嵐吹く」にあります。この歌は、江戸時代後期の随筆に記録されており、このころ栄えてきた八王子宿の織物市のにぎわいを背景に「桑都」と言い習わされてきました。日本で「桑都」と称されるのは八王子だけです。

江戸時代の八王子は、宿が整備され、市場が立ち、周辺の村々からの繭や生糸、織物の集散地として栄えました。明治時代に入っからは、萩原彦七製糸場などの大規模な製糸工場が建てられ、大正時代になると手機^{てばた}から力織機^{りきしよつき}へと電化していきました。第一次世界大戦(大正3年)ごろの日本経済は、かつてない好景気となりました。大正時代の八王子の産業の中心は織物業でしたが、甲州街道沿いには商業も発展しました。

織物業の躍進に支えられ、大正6年(1917年)に、八王子は東京府下で2番目に市制を施行しました。その後、第二次世界大戦による被害で、織物の生産は大幅に落ち込みましたが、生産者の努力により回復し、戦後の一時期は「ガチャ万」(「ガチャ」っと織れば「万」と儲かる)と呼ばれるまでになりました。その後、着物の生地だけでなく、ネクタイ・ニット・マフラー地など種類を増やし、現在では世界に向けてテキスタイルを発信し、「多摩織」の技術は職人の手技によって継承されています。



多摩織の技術を継承している織物工場



織物のまちの面影が残るのこぎり屋根の建物

桑都ことはじめ

八王子は、江戸時代の後期から桑都として知られていました。これは養蚕・製糸・織物が盛んだったことを示しています。18世紀の初めごろ、大都市江戸では、町人の経済力が強まり、^{しまがら}縞柄の絹織物が好まれるようになりました。この影響は次第に江戸近郊の町や村に及び、19世紀に入るところには、各地に定期的に織物市が成立するようになります。この市は^{しまいち}縞市と呼ばれ、八王子の市では横山宿と八日市宿にわかれて開かれ、大変なにぎわいを見せていました。



『桑都日記』桑都朝市

養蚕と風習

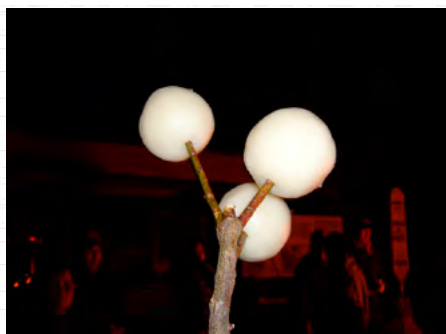
「蚕を飼って繭^{まゆ}をとる」——戦前まで多くの農家では、養蚕にも力を入れていました。山がちで平地の少ない八王子では、田んぼや畑から得る収入だけでは生活することは難しく、養蚕は貴重な収入源でした。今ではほとんど見られなくなりましたが、養蚕の面影は今も残されています。小正月飾りに「マユダマ」という繭の形を模したお団子を作って飾り、どんど焼きのときに焼いて食べる行事があります。この行事は繭の豊作を祈願するものでした。養蚕とともに生まれた風習は、今も市民の間で大切に受け継がれています。



マユダマ焼き（上川中部町会どんど焼き）



桑を食べる蚕



マユダマ（上案下のセエノカミ）

織物のまち

江戸時代、八王子で織られた縞の織物は、名産品の一つに数えられていました。明治時代は、男物の反物の生産地として全国的に有名になりました。織機は高機たかはた（木製手機てばたの一種）を使い、手作業で織っていました。また、繭から糸をとる大規模な製糸工場が建てられました。大正時代の初めに電気が通じると電気で動かす大型の力織機りきを使う織物工場が増えました。織物の技術は進歩を続け、昭和10年（1935年）代には、ネクタイ地など複雑な模様の布地を織る工場も出てきました。しかし、昭和20年（1945年）8月2日の八王子空襲で市内の織物工場は大きな被害を受けました。戦後、織物業は復興し、昭和30年（1955年）に開発された、毛（ウール）を用いて紋様を織り出す紋ウールが大ヒット商品となり、その後、絹とウールを用いたシルクウールを開発するなど、八王子は再び「織物のまち」として知られるようになりました。



織物工場での作業（昭和10年〈1935年〉）



ネクタイ（昭和15年〈1940年〉ごろ）



紋ウール（昭和40年〈1965年〉ごろ）

～繁盛を祈る人々～

織物に携わる人々の信仰の対象は機守様で、特に大善寺境内にあった機守神社は多くの信仰を集めました。

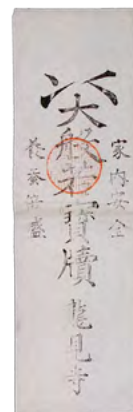
高尾山薬王院をはじめ、市内の寺社では養蚕守護の御札を出していました。繭の収穫量の多寡がその年の生活を左右するほどの重大事であったことがうかがえます。



大善寺機守白瀧姫御影軸



高尾山薬王院の養蚕守護札



龍見寺の養蚕倍盛札

伝統工芸の多摩織

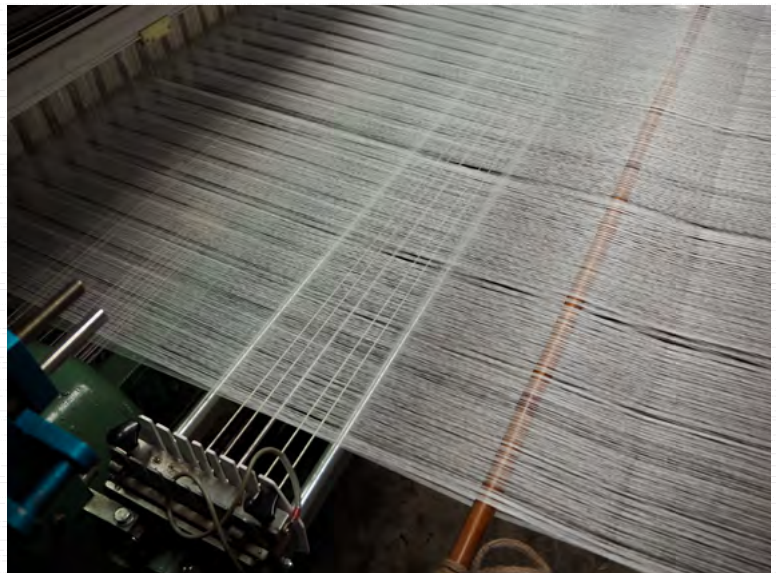
八王子には、現在に至るまで守り続けられてきた伝統的な織物があります。昭和時代初期、婦人向けの織物の開発が進み、新たに紋織りの御召「多摩結城」が織り出されました。戦時中、多摩結城の技術を途絶えさせないようにするため、一部の工場で織り続けられていました。そして昭和55年(1980年)、御召織「多摩結城」をはじめとする5種の技術が「多摩織」の名称で通商産業大臣(現経済産業大臣)から伝統的工芸品に指定されました。次いで、昭和57年(1982年)には、東京都から伝統工芸品の指定を受けました。

多摩織には、御召織、紬織、風通織、変り綴、縞り織の5種があり、いずれも着尺地、羽織地、コート地、袴地に用いられています。このうち主力商品とされる御召織は、先練り先染めの絹糸を平織、綾織、縞子織、もしくは変化織とした縮緬で、いずれも生地表面には細かいシボ(皺)が作られます。このような多摩織が現在も脈々と受け継がれてきた背景には、多摩織を織る技術の保存に努めてきた伝統工芸士の存在があります。

伝統的な織物を継承する一方で、和装洋装の枠を超えた新しい織物の開発が進められ、ジャカード織やドビー織の技法を駆使して様々な織組織が作り出されています。多摩織の技術は、長い歴史を持つ八王子織物の伝統を引き継ぎながら、次代を担うファッション界に向けて発信され続けています。



多摩織で製作した大行燈 (高尾山スミカ)



機械織の様子

～八王子織物の高い評価～

八王子では、明治10年(1877年)に開催された第1回内国勸業博覧会から、生糸や繭、織物など創意工夫をした製品を出品していました。特に織物は、回を追うごとに高い評価を得てきました。出品者の間では、さらに良い製品を作り出そうという機運が高まりました。

しかし、明治18年(1885年)に行われた繭糸織物陶漆器共進会(五品共進会)では、八王子織物は期待した評価が得られませんでした。これに奮起した織物仲買商らにより、製品の品質管理と染色技術向上を目的に八王子織物組合と八王子織物染色講習所が設置されました。以降、八王子織物の評価は徐々に上がり、機業家は独自の工夫を重ねて様々な織物を作りだし、その品質と技術は高く評価されました。



織物商標 (明治時代)

織物のまちからものづくりのまちへ ～繊維産業から先端産業へ～

昭和16年(1941年)、太平洋戦争に突入し、繊維工業は軍事産業への転換や、設備の屑化供出が求められました。そして昭和20年(1945年)8月、八王子は市街地の80パーセントが焼失となる大空襲を受け、工場数は昭和16年(1941年)のわずか20パーセントほどに激減しました。しかし、浅川により延焼をまぬかれた北側には、織物関連の工場が残りました。その後、八王子の織物産業は、戦後の復興と共に立ち直り、「ガチャ」っと織れば「万」と儲かる「ガチャ万」景気を迎えました。

戦前・戦後を通じて、八王子の地域経済を支えてきた繊維産業は、その後、海外製品の台頭などの影響により、衰退することとなりましたが、力織機のメンテナンスで培った高い技術力や織物工場の活用などを背景とし、電気機械、精密機械をはじめとする近代工業が著しく成長しました。現在では高度な技術をもとに先端産業に大きく貢献している企業が集積しており、「織物のまち」の顔だけでなく、「ものづくりのまち」としての顔も併せ持っています。

試作車開発部品

自動車・オートバイの駆動系部品



ベベルギヤ (株式会社内野製作所／戸吹町)

自社製品の開発

利用者のニーズに応える製品開発



文化財発掘に関わる用具類
(第一合成株式会社／元本郷町一丁目)

IoT

アプリ開発



IoT*を活用した山車の歴史解説アプリ
(株式会社夢現舎／南大沢一丁目)

*IoT (Internet of Things)

情報通信機器だけでなく、世の中に存在する様々なものに通信機能を持たせ、インターネットに接続したり相互に通信することで、自動認識や自動制御などを行うこと。



織物商標 (明治時代)



桑都綾織 (織物の見本帳) (明治35年〈1902年〉)



主な構成文化財

①多摩織



八王子で生産される織物で、御召織、紬織、風通織など5つの品種があります。昭和55年(1980年)に通商産業大臣(現経済産業大臣)から伝統的工芸品に指定されました。そして昭和57年(1982年)には、東京都から伝統工芸品の指定を受けました。

②どんど焼き



正月飾りなどをまとめて小正月(正月14日)に焚き上げる、市内各地で行われる行事です。小正月前後の休日に行う地域もあります。「どんど焼きで焼いた団子を食べると病気になる」といわれ、無病息災などを祈願して「マユダマ」(繭玉を模したお団子)を焼いて食べます。

③高月のクワ



市記

〔高月町〕

山地に自生する桑の一種で、現在は根元から2株にわかれています。推定樹齢は400年です。栽培した桑による養蚕がいつごろから行われるようになったのかは定かではありませんが、当初は「高月のクワ」のような自生の桑を利用して、蚕が飼育されていたといわれています。

④桑都日記稿本



都府 古文書

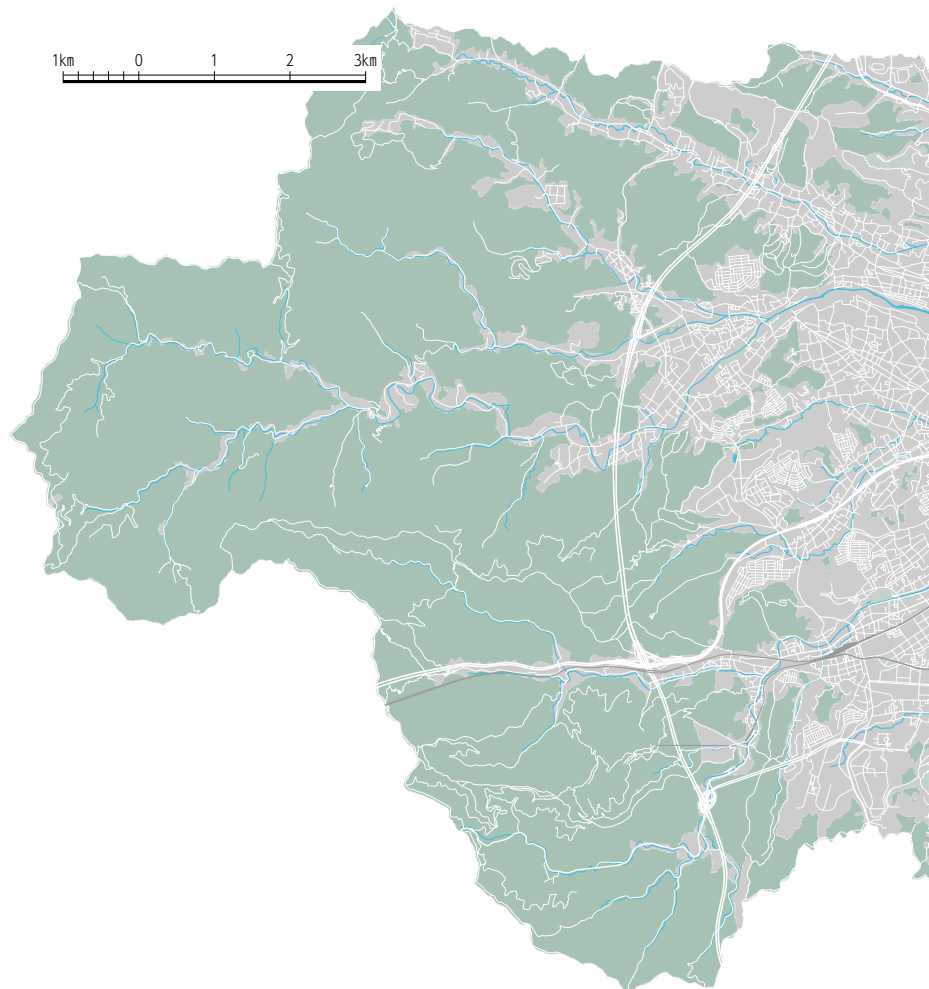
千人同心組頭の塩野適斎が著した八王子の地誌で、「桑都」の美称が付けられています。当時の地形、気候、文化、産業や千人同心の歴史などを知るうえで貴重な史料です。郷土資料館に寄託されています。

⑤桑並木通り



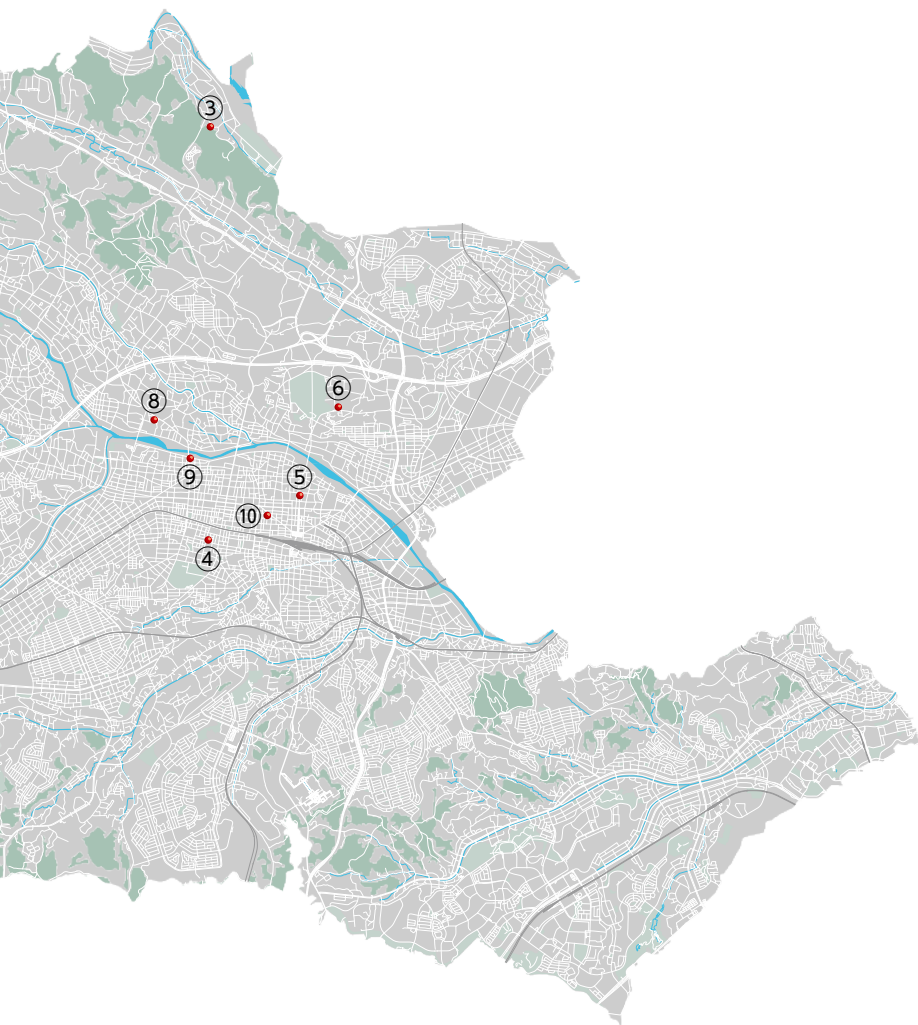
〔横山町、元横山町ほか〕

「八王子駅入口」交差点から国道20号バイパスの交差点「浅川大橋南」間の沿道には桑の木が植えられており、桑都の面影を感じることができます。桑の並木は全国でも珍しく「八王子十八景」にも選ばれています。



都府：都指定有形文化財 市記：市指定天然記念物

※①は位置が示せないため地図上にはありません
 ※②⑦は市内各所に点在しているため地図上にはありません
 ※⑩は見番（三業組合事務所）の場所を示しています



⑥機守神社



〔大谷町〕

「織物のまち」として栄えた名残の一つが大善寺境内に祀られる「機守様」です。古くから養蚕と機織り、そして縁結びの神様として信仰を集めてきた白滝姫を祭神とし、現在も織物関係者や地域住民に信仰され続けています。

⑦のこぎり屋根の建物



〔平岡町ほか市内各所〕

かつて織物工場や染色工場として稼働していた工場が、市内各所に残っています。北に向けられた屋根の勾配のきつい側にガラス等の透過性のある素材を入れることで、大規模な建物でも部屋の奥まで自然光を取り込むように工夫されています。

⑧旧片倉製糸紡績八王子製糸場蚕室



〔中野上町四丁目〕

昭和12年(1937年)に片倉製糸紡績の八王子製糸場に建てられた蚕室が、当時の姿のまま今も残されており、製糸場の面影をしのぶことができます。現在は、日本機械工業株式会社が管理しています。

⑨萩原橋の碑



〔平岡町〕

萩原橋は浅川に架かる秋川街道の橋で、明治34年(1901年)に竣工しました。橋の名は、建設費を寄付した製糸家の萩原彦七にちなんで付けられました。「八王子八十八景」に選ばれています。

⑩八王子芸妓



織物のまちとして繁栄した中町界隈には、多摩地域で唯一の花街がありました。織物産業と盛衰を共にしてきた花街ですが、芸妓衆を中心にした再興プロジェクトが発足し、現在では約20名の芸妓衆が活躍しています。演目の中には、織物の民謡である八王子オリャセ節があり、織物のまち八王子を現在に伝えています。

文化財の保存・活用事例

つくるのいえ

中野上町は、織物のまちの“おもかげ”を残しつつ、新しい取組を模索しながら発展しようとしている町です。昭和17年(1942年)、葛飾区から奥田染工場が移転してきました。バブル期に繊維産業が斜陽産業となった時は、人とのつながりを大切に考えて染工場を継続しました。現在では、繊維関連の“ものづくり”の拠点として、生産地とクリエイター、生産地と生産地をつなぐ「つくるのいえ」(中野上町一丁目)をオープンしました。モノ・コト・人が楽しく交流する中で、八王子の織物の伝統を未来につなげる活動をしています。



多摩織の技術を継承

澤井織物工場は、絹織物の技を100年以上にわたり伝承しつつ、八王子織物の伝統を受け継いでいます。その技術は「多摩織」として、通商産業大臣(現経済産業大臣)の伝統的工芸品、東京都の伝統工芸品の指定を受けるまでに高められました。現在でも、伝統を守りつつ新しい生地や技術の開発に取り組んでいます。ブランド力の強いアパレルメーカーの製品を手掛けるほか、アメリカのIT企業にも技術供与するなど、付加価値の高いものを手作りし続けていることが世界的に評価されています。



はちもんものづくり探検隊

かつて「桑都」と呼ばれ、繊維産業の一大集積地であった八王子。今でも多くの繊維産業が残っています。また、金属や電気機械関連などたくさんの魅力的なものづくりの企業、工場が存在しています。「はちもん実行委員会」は、ものづくりに携わる企業や団体、個人を応援し、市内だけではなく市外に向けて八王子のものづくりの魅力を発信していく活動をしています。子どもたちが八王子のものづくりの現場を訪れ、職人から直接その歴史や成り立ちを学び、さらにものづくりを体験する「ものづくり探検隊」という社会科見学を開催しています。



八王子芸妓の継承と中町のまちづくり

織物産業と盛衰を共にしてきた八王子芸妓の文化が再興され、芸妓衆は地元の行事に積極的に参加して技芸を披露するなど、伝統を継承しています。また、花柳界の隆盛で栄えた「粋なまち中町」の再生を目指す住民有志の取組も進められ、商工会議所や住民が結成した「八王子黒堀に親しむ会」による花街文化の伝承と情報発信や、「中町まちづくり協議会」による伝統と文化が薫るまちの景観整備や地元主体のまちづくり活動、地元と芸妓衆のコラボレーションによる「中町音頭」の制作などが行われています。



世界とつながった絹の道

絹の道が
生糸の他に
運んだものは？

八王子から横浜へ、そして世界へ、生糸を運ぶ道としてにぎわった絹の道。横浜に居留した西洋の人々がこの道を通り、西洋の文化も運びました。絹の道を通じて世界とつながった八王子の人々の生活がどのように変化していったのか、紐解いてみましょう。

絹の道



養蚕農家の様相をよく残している小泉家屋敷



絹の道資料館と鑓水の景観

八王子の中心部から鑓水を通して横浜へ至る浜街道は、輸出用の生糸の流通路となり、後に「絹の道」と呼ばれるようになりました。

安政6年(1859年)の横浜開港により、桑都八王子はいち早く新しい時代を迎えました。谷戸に囲まれた中で農業や養蚕などを生業としていた鑓水は、外国人遊歩規定で定められた横浜から40キロメートルの圏内に位置することから、日本の養蚕に興味のあった西洋人から注目されました。考古学者のハインリヒ・シュリーマンや写真家のフェリックス・ベアト、スイス人の商人カスパー・ブレンワルドなどが、浜街道を通過しながら、八王子宿や養蚕の様子などを旅行記や写真に残しています。

明治時代に入ると、八王子と横浜を結ぶ浜街道は、生糸商人や西洋人が行き来するようになりました。南多摩郡鑓水村の商人は、生糸の売買で大きな富を得て、沿道の大塚山に道了堂を建てたり、諏訪神社に石燈籠を寄進したりするなど、文化的な功績も残しました。さらに、生糸商人が横浜で見聞した西洋の新しい文化や横浜での出来事を鑓水へ、そして、八王子の中心部へ伝えていきました。

生糸商人が 住んでいた鑓水

鑓水は、多摩丘陵の中にあり、傾斜地に水田や畑とともに桑畑もたくさんありました。幕末から大正時代にかけては、養蚕がたいへん盛んに行われました。当時の養蚕農家の民家建築の様式を伝える「小泉家屋敷」が今も鑓水に残っています。母屋の中では養蚕が行われていました。鑓水の人々は、多摩丘陵の中で自然とともに生業を営んでいました。



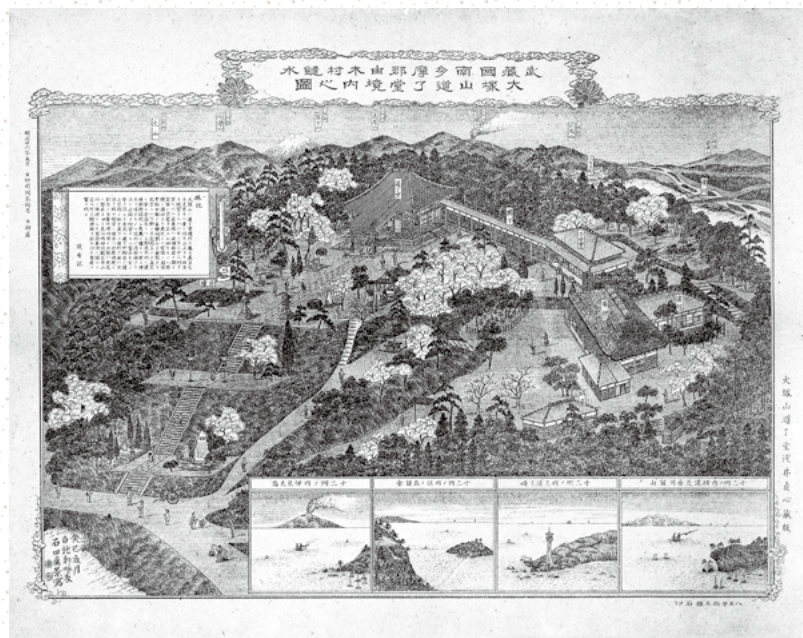
小泉家屋敷



鑓水ののどかな田んぼの風景



19世紀後半の黒船の来港をきっかけとした横浜開港による生糸輸出の増加により、のどかな農村で農事や養蚕を行っていた鑑水の人々の生活が一変していきました。鑑水には元々、周辺の村々から集荷した糸を八王子宿の市で売る生糸商人がいました。彼らは、開港を機に、八王子宿の市で取引されていた「八王子糸」を買い取り、鑑水峠を越えて横浜へと運んで生糸を売ったことから、後に「鑑水の商人」と呼ばれました。この商売により富を得た鑑水の生糸商人の八木下要^{やぎしたようえもん}右衛門は見事な石垣のある屋敷を築き、「鑑水の石垣大尽」とも呼ばれました。現在、この屋敷跡には絹の道資料館が建っています。



武蔵国南多摩郡由木村鑑水大塚山道了堂境内之図

鑑水の商人たちは、築き上げた富を地域の観光振興のためにも投じたようです。現在、大塚山公園には、道了堂の跡が残っています。明治7年(1874年)に村内の生糸商人からの寄付によって建立され、浅草花川戸から遷された道了尊や書院、庫裏などの建物が並び、何本もの桜が整えられました。さらに大塚山は「十二州見晴し」と呼ばれるほど風光明媚な場所でもありました。大塚山は現代的な言い方をすれば、一大観光スポットとして開発されたといえるでしょう。

外国人が記録した 絹の道とその周辺の風景

鎌水の古い地図を開くと、「浜道」と記された一本の道があります。文久3年(1863年)ごろ来日したフェリックス・ベアトというイタリア生まれの写真家が撮った、当時の日本の風景写真が横浜開港資料館に数多く保存されていますが、その中の2枚に幕末期の鎌水の村の様子が写っています。このうち「View on the Road to Hachigou」とタイトルが付けられた写真に見える道が、現在の「絹の道」です。桑の木と石仏が見え、茅葺の家屋が写り、当時の鎌水の風景がよくわかります。また、横浜の居留地にいたイギリスの外交官のアーネスト・サトウも、外国人遊歩規定で許された範囲の北限であった八王子にやってきて、生糸商人の家に泊まっています。

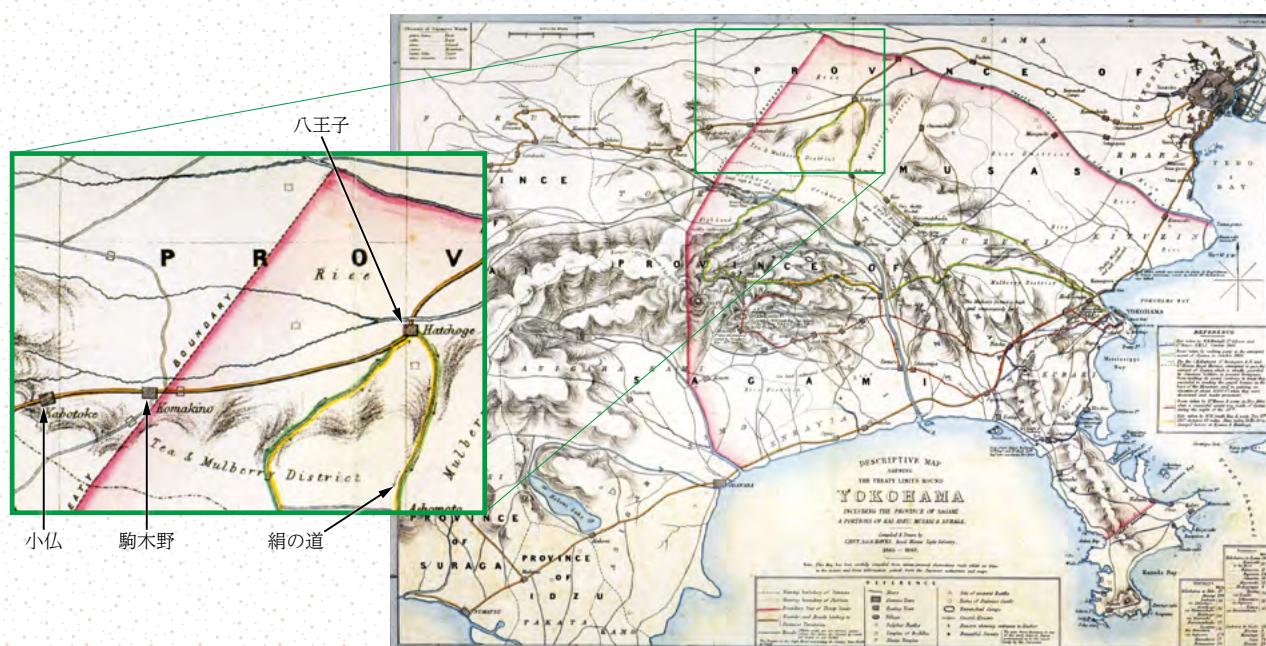
鎌水には、八木下要右衛門が嘉永4年(1851年)に建てた2階建ての洋館「異人館」がありました。ここは外国人を応接するための建物だったといわれています。当時としては珍しい螺旋階段がありました。八木下要右衛門屋敷の跡に建てられた絹の道資料館の敷地内には、今もその遺構が残されています。



幕末に撮影された鎌水の農村「YARIMITCHI」
(横浜開港資料館所蔵)



幕末の絹の道「View on the Road to Hachigou」
(横浜開港資料館所蔵)



横浜周辺外国人遊歩区域図 (横浜開港資料館所蔵)



絹の道を介して 世界とつながった八王子

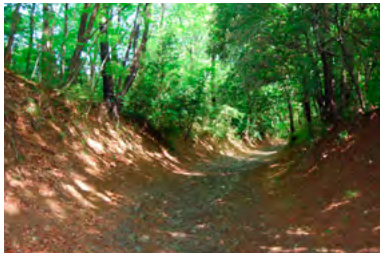
明治維新の前後、輸出用の生糸は、八王子はもとより周辺の産地からも集められ、浜街道を通過して横浜へと運ばれていきました。生糸は、横浜港からの輸出品の3分の2以上を占めていました。浜街道が通る鎌水は、関東地方の養蚕地域と横浜間に位置していたことから、生糸輸出の中継地、仲買地として発展していきました。鎌水の商人は、浜街道を通過して横浜に生糸を卸し、その収益と西洋の文化を鎌水にもたらしました。鎌水の生糸商人が横浜から持ち帰った本『横はまみやげ』には、アメリカ人やイギリス人などの西洋文化の様子がわかる挿絵が載っています。また、鎌水の商人たちは、英語学習のために練習帳で勉強し、世界との交流を意識していたようです。外国人への好奇心や関心の高さがうかがえます。世界へ向けられた関心は、鎌水に留まらず、八王子の中心部やその周辺の人々にも伝播したことでしょう。このように、八王子の人々は西洋の文化を吸収し、明治時代という新たな時代を歩んでいきました。



鎌水の生糸商人が横浜から持ち帰った本『横はまみやげ』と英語を学習するための練習帳『横文字早学』

主な構成文化財

① 絹の道



市史

〔鎌水〕

幕末期から明治初期まで、八王子から横浜に輸出用生糸を運んでいた道です。この「絹の道」という名前は、昭和32年(1957年)に郷土史家である橋本義夫によって名付けられました。特に昔の面影をよく残す未舗装部分は、平成8年(1996年)に文化庁選定「歴史の道百選」に選ばれました。

② 小泉家屋敷



都有民

〔鎌水〕

多摩地区南西部の丘陵地帯の養蚕農家としての様相をよく残している建物です。現在の母屋は、明治11年(1878年)に再建されたもので、入り母屋造りの茅葺屋根に、田の字形(四間取り)という南多摩の丘陵地に旧来から見られる典型的な農家建築の様式を取っています。上の階では養蚕が行われていました。

③ 八木下要右衛門屋敷跡



〔鎌水〕

やぎしたようえもんは鎌水商人として知られ、生糸商で莫大な財を得ました。屋敷の南の隅に建てられていた書院は、別名「異人館」と呼ばれ、訪れた外国人をもてなした場所であったと伝えられています。

④ 永泉寺



〔鎌水〕

永泉寺は、天正元年(1573年)に創建されたと伝わる曹洞宗の寺院です。本堂は、明治17年(1884年)に火事で焼けたため、現在「絹の道資料館」が建つ敷地に残されていた八木下家の母屋を移築して本堂にしています。

⑤ 諏訪神社



市有 建造物

〔鎌水〕

諏訪神社は元々鎌水村内の別の場所にあった諏訪・八幡の2社を子の権現がある現在地に移し、明治10年(1877年)にまとめられたものです。境内には、鎌水商人の寄進による石灯籠が現在も残されています。



都民：都指定有形民俗文化財

市有：市指定有形文化財

市史：市指定史跡



⑥ 道了堂跡



〔鎌水〕

道了堂は、明治7年(1874年)鎌水商人^{おれつかご}大塚志郎吉が中心となって、^{あさくさはなかわど}浅草花川戸から道了尊を勧請して建立されました。現在は、礎石の跡と灯籠が残り、かつての面影をしのばせています。

⑦ 大塚山公園



〔鎌水〕

大塚山の山頂からは、十二州を望むことができたとわれています。公園は、道了堂の跡地を平成2年(1990年)に整備したもので、入口には絹の道碑が建っています。

⑧ 絹の道碑



〔鎌水〕

「絹の道」の名称は、昭和32年(1957年)郷土史家の橋本義夫による絹の道碑の建立に由来しています。

⑨ 御殿橋



〔鎌水〕

この「御殿橋」から「絹の道碑」が建つ場所までの約1.5キロメートルの道が市史跡絹の道(市指定史跡)に指定されています。

⑩ 八王子道道標



〔鎌水〕

横浜と八王子を結ぶ道標として慶応元年(1865年)に建てられました。正面に「此方 八王子道」と大きく刻まれ、東面に「此方はら町田 神奈川 富士さわ」、西面に「此方はし本 津久井 大山」とあり、裏面に「慶応元乙丑 仲秋吉日 武州多摩郡 鎌水村」とあります。「絹の道」が盛んに利用されていたころの貴重な遺物です。

文化財の保存・活用事例

文化財見て歩き「絹の道を歩く」

八王子市では、市内に残る原始・古代から近現代までの文化財を「見て歩き」ながら、八王子の歴史文化について学ぶ事業を行っています。

平成30年(2018年)には、鑓水地域を歩き、近世から近代にかけての「絹の道」の歴史について理解を深めることを目的として実施しました。絹の道を通る鑓水は、幕末の横浜開港後、輸出品として注目された生糸の取引で栄華を誇った鑓水の商人の痕跡が多く残されています。

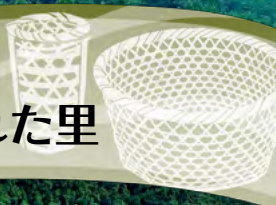


絹の道資料館

平成2年(1990年)3月に開館した絹の道資料館は、生糸商人の八木下要右衛門の屋敷跡に残された石垣を活かし、当時の鑓水の様子や養蚕、絹の道に関する様々な出来事を伝える展示スペース、来訪者の休憩スペースが設けられた資料館です。郷土資料館のガイドボランティアが兼務してガイドを行っています。



自然との共生で育まれた里



里の景観や文化は
どのように
受け継がれている？

丘陵や河川、湧水の周辺では、自然と共生した人々の暮らしが営まれていきます。自然と人々の暮らしが一体となった里の景観や文化はどのように育まれ、受け継がれてきたのでしょうか。里に残る景観や人々の生業、暮らしの様子から読み解いてみましょう。

上恩方町の田園風景



高月の集落に残る小径

八王子は、丘陵地の緑や川、湧水など豊かな自然環境に恵まれ、その中で人々が生活を営んできました。高月町の田園風景をはじめとして、市内には自然と人の営みが織りなす美しい景観が残されています。里に生息するホタルや希少種のキンラン・ギンランは、自然とともに生きてきた人々の思いを伝えているようです。

里では、養蚕や炭焼きなどの生業が営まれ、^{かてめし}どんど焼きや福の神などの伝統的な行事が引き継がれています。また、^{かてめし}糰飯などの故郷の味が今なお親しまれています。

里には農耕地とともに生活・生業の空間である集落が形成され、民家や蔵、生垣、里道、石造物、水路などが一体となり、文化的な景観を構成しています。その中で長く積み重ねられた文化や風習は、里に暮らす人々により守り続けられています。



道の駅八王子滝山で販売されている市内で採れた野菜

里の文化的景観

日本の多様な気候風土の中で、人々は、自然と関わりながら生業を営むことで暮らしを立て、長い年月をかけてその土地ならではの特徴的な景観を築き上げてきました。このような生活や生業、風土に根ざした里の景観は、日本の文化を理解する上でとても大切です。近代化とともに、各地のこのような景観は失われつつあります。文化財保護法では、こうした景観を受け継ぐ土地を「文化的景観」とし、文化財の一つに位置づけています。八王子にも、季節の変化を映し出している里の景観が今も大切に残されています。

水田の景観

八王子の水田は、河川の水を引いてつくられた水田と、湧水や沢の水が流れ込む谷戸につくられた水田の2つに分けることができます。秋川の良質な水を引いてつくられた高月町の水田は、八王子の米どころとなっており、日本の原風景ともいえる田んぼが広がっています。一方で、谷戸の水田が、宅地開発とともに姿を消していきましたが、長池公園(別所)の中には、溜池と広大な雑木林、田んぼといった里の環境が保全されています。また、上川の里特別緑地保全地区(上川町)では、かつては数十枚の棚田を有したこの地を再び里として甦らせようと、地域住民やNPO法人等が活動しています。市内各地では伝統的な景観を残そうとする取組が行われています。



都内一の面積を誇る高月町の水田



谷戸に育まれた東中野の水田



長池公園内での田植え風景

畑地の景観

八王子市の農業生産高は都内で一位を誇ります。古くはイモ類の栽培が中心でしたが、現在では、ダイコンやナス、トマトなど、市域全域で様々な農産物が生産されています。市内で伝統的に栽培されてきた川口エンドウ、八王子ショウガ、高倉ダイコンの3種類は、「江戸東京野菜」として出荷されています。このうち、高倉ダイコンのすだれ干しの風景は、「八王子八十八景」にも選ばれています。

麦栽培が盛んだった八王子では、明治時代末期に「宗兵衛裸麦」が品種改良により生まれました。昭和期には、一時的に生産されなくなりましたが、現在は復活栽培が行われています。

また、市内で採れた野菜は、市内の小・中学校給食で提供され、子どもたちの郷土を愛する心を育んでいます。



小比企丘陵に広がる畑地



高倉ダイコンのすだれ干し



宗兵衛裸麦

湧水の景観

湧水は、古くから飲料、洗濯、農業などに広く利用され、地域住民の生活や生業と深く結びついてきました。八王子市内では78か所の湧水が確認されています。また、市内の5か所の湧水(六本杉公園、片倉城跡公園、叶谷榎池、子安神社〈中野山王〉、小宮公園)が、東京の名湧水57選に選ばれています(現在は飲用不可)。



エノキの大木がある叶谷榎池



片倉城跡公園にある水車



小比企丘陵に広がる放牧地

放牧の景観

古くから野草地は、放牧地として活用されてきました。採草、放牧などによって形成、維持され、人と自然によって作り出された里の景観の一つとなっています。八王子の酪農の始まりは、明治25年(1892年)にさかのぼります。井草甫三郎によって、三多摩ではじめて導入されました。

水路の景観

市内にはかつて、農作物の生産性向上などに大きな役割を果たした水路が多くみられました。近年では、農地の宅地化が進み水路の多くは暗渠化^{あんきょ}されて姿を消していきました。残された水路は、地域住民などの維持管理により、親水空間や美しい景観を形成しています。また、防火用水としても活用されるなど地域に潤いを与えています。



高月町の水路

生業・暮らし

かつて里山は、生業や暮らしの原点でした。直接的に里山から採取される木の実やキノコ、山菜、獣肉だけでなく、人々が食の煮炊きに利用するエネルギーとなる薪や炭も里山から産出されていました。また、堆肥などに利用するクズ(落葉)の採取も行われ、資源を循環させて活用する生活様式ができていました。

養蚕

戦前までは養蚕農家一軒で、トラックの荷台いっぱいの繭を製糸工場に持っていく光景があたりまえに見られました。現在、市内では数少ない農家が養蚕の伝統を守り継いでいます。そのうちの1軒である長田養蚕では、学校の体験学習の中で、繭から糸をとることは「蚕の命をいただいている」ということを子どもたちに教えています。



炭焼き

かつては、耕作の合間に行われていた養蚕と共に、里山の木材を炭焼きにして生活の糧としていました。現在は生業として行われていませんが、長池里山クラブなどが間伐材を利用し、里山の自然の保護活動の一環で実施しています。





メカイ

篠竹で作る六ツ目編みの籠のことで、江戸時代の終わりごろから行われていたと伝えられています。農閑期の秋の終わりから冬にかけて、昼間は薪とりや落ち葉掻きなど外の仕事をし、夜になると囲炉裏や火鉢を囲んで一家総出で作業にかかったといえます。

郷土食

農家の暮らしなどに関わりが深い郷土料理がたくさんあります。市内の学校給食では、^{かてめし}糲飯などを献立に加え、郷土を愛する心を育んでいます。



糲飯

大勢の人が集まったときに振る舞われた行事食です。「^か糲てる」とは「混ぜる」という意味で、米が貴重だった時代に野菜などを混ぜて食べたことからこう呼ばれています。



たらし焼き

おやつとして食べられていました。小麦粉を水で溶いて焼いたもので、砂糖醤油をつけて食べます。



煮だんご

普段の生活でよく食べられていました。小麦粉を水でこねた団子を入れた「すいとん」のようなものです。

主な構成文化財

①高月の田園風景



〔高月町〕

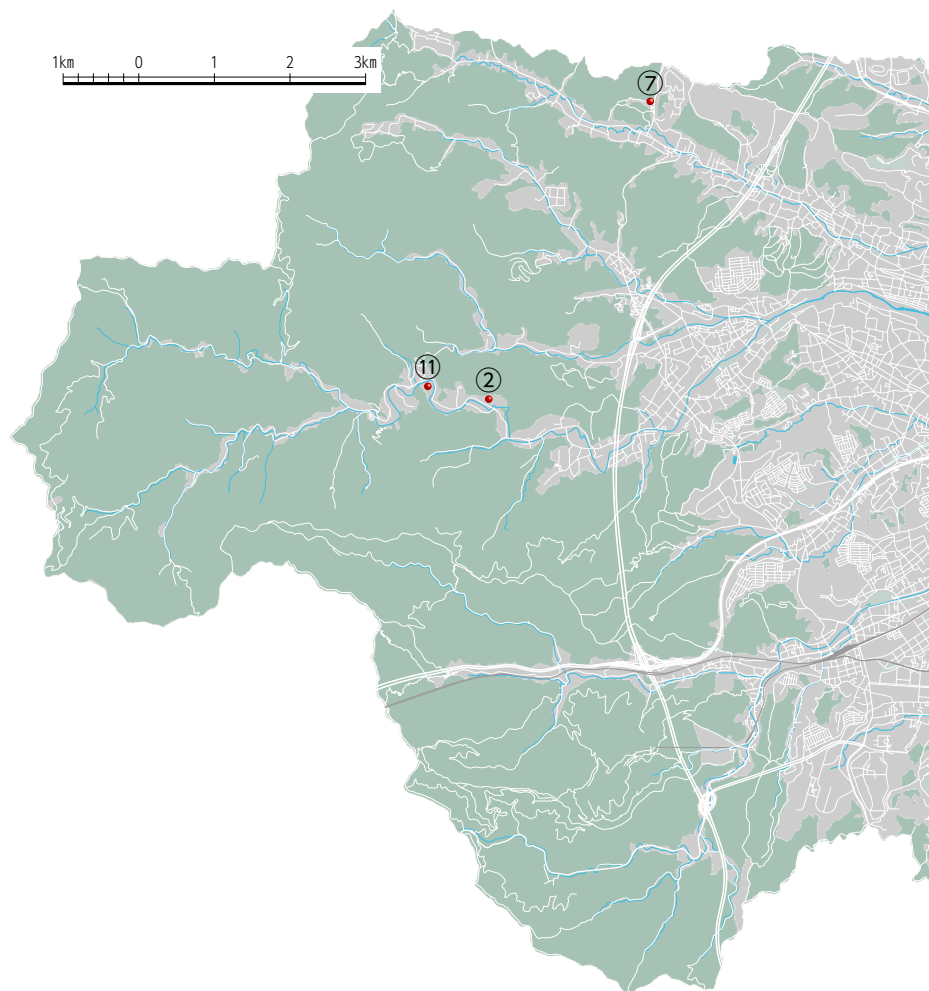
高月の田園風景は、都内最大の面積を誇り、地域の人々の生活や生業により形成された景観です。周辺には稲作などの農業を営む集落があり、滝山城跡と高月城跡を眺望することができます。

②上恩方の田園風景



〔上恩方町〕

陣馬街道沿いの谷戸地に広がる上恩方の田園風景は、地域の人々の生活や生業により形成された景観です。街道沿いには、農業を営む集落があり、童謡「夕焼小焼」の歌詞の情景を連想することができます。



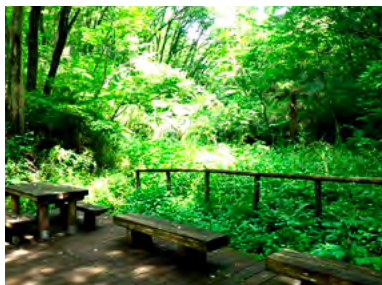
③栃谷戸公園



〔みなみ野五丁目〕

八王子ニュータウン内にある、段々畑など里山の風景を再現した公園です。田植えなどの体験学習が行われています。展望台から眺める富士山も素晴らしく、「関東の富士見百景」、「八王子八十八景」に選ばれています。

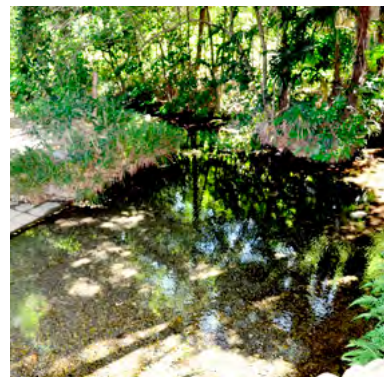
④小宮公園の大谷弁天池



〔大谷町〕

ひよどり沢で湧出した水が、雑木林の谷間を流れる大谷沢を通して、一部が大谷弁天池に流れています。大谷弁天池は、天明年間の干ばつの際、農民を救うために溜池を掘って弁財天を祀ったと伝えられています。東京都環境局の「東京名湧水57選」に選ばれています。

⑤子安神社の湧水



〔中野山王二丁目〕

「明神様の湧水」として昔から近隣の人々に利用されてきました。東京都環境局の「東京名湧水57選」に選ばれています。



⑥六本杉公園湧水池



〔子安町二丁目〕

JR八王子駅の南側、六本杉公園内にある湧水池です。隣接する「いずみの森義務教育学校」の校名の由来にもなっています。また、「八王子十八景」にも選ばれています。

⑦上川の里特別緑地保全地区



〔上川町〕

豊かな自然環境の保全を目的に、八王子市が特別緑地保全地区として指定しました。地域の人々やNPO法人等によって、水田や手入れされた雑木林など、昔の里山の風景が取り戻されつつあります。

⑧八王子堀之内里山保全地域



〔堀之内〕

保全地域の大部分はコナラなどの雑木林のほか、スギなどの植栽林が点在しています。区域内の谷戸の一部は水田として利用されています。

⑨八王子滝山里山保全地域



〔滝山一丁目、梅坪町〕

丘陵地の谷戸地形に、湿地、草地、雑木林、自然林など多様な自然が組み合わさった里山の環境が残る地域です。キツネやゲンジボタルなどが生息し、植物では、キンラン、キツネノカミソリなどが自生しています。

⑩長池公園



〔別所二丁目〕

別所地区に位置する自然保全型公園です。公園北側には広々とした芝生広場と長池見附橋、人工の姿池とが織りなす景観が広がります。一方でその奥には、長池・築池の2つの溜池と広大な雑木林、田んぼなど、里山の環境が保全されています。

⑪力石用水



〔上恩方町〕

かつて田んぼに引かれていた水路は衰退してしまいましたが、水路を活用してニジマスの養魚場が営まれ、北浅川ではマス釣りを楽しむことができます。

文化財の保存・活用事例

農業でまちづくり

地域住民や農家・事業者などが参加するNPO法人はちぶろが耕作放棄地を活用し、酒米を生産しています。現在酒蔵の整備を検討するなど、八王子産の米を原料とした日本酒造りを通して地域の活性化に取り組んでいます。



上川の里特別緑地保全地区での里山整備

上川の里特別緑地保全地区は、長い間人の手が入らず、うっそうとしたままになっていました。かつては数十枚の棚田を有したこの地を、地元の人々やNPO法人等が再び里山として整備を進めています。子どもも大人も力を合わせ、存分に遊び楽しみながら、「みんなのふるさと」のような場所にしていく活動をしています。



メカイづくり

メカイづくりは江戸時代の終わりごろから行われていたと伝えられています。地域に伝わる民俗技術の習得と次代への伝承に、里山農業クラブが取り組んでいます。

当クラブは、地域に伝わる民俗技術を後世に残すために記録するとともに、メカイの普及のための実演会・講習会を開催しています。なお、メカイ製品の販売も行っています。



沿道集落の再生活用

小津町では、地域住民が中心となりNPO法人小津倶楽部を設立し、耕作放棄地や山林などの地域資源の再生事業、古民家のリノベーションなどの活動を行っています。小津倶楽部は、「地域を元気にする活動をずっと継続していきたい」という思いで活動しながら「様々な人の力を借りながら活動を広げて、恩方地域全体を元気にしたい」という夢を描いています。



はちおうじ物語 其の八

祈りのお山 高尾山の魅力

高尾山はなぜ
世界中の人々を
惹きつけるのか？

多くの市民に親しまれている高尾山。いにしえから信仰の山であり、現在、国内外問わず多くの登山客も訪れているこの山の魅力とは、どのようなものなのでしょうか。

修験道の歴史や天狗の伝説が残る高尾山薬王院

高尾山はいにしえより霊山として崇められ、戦勝の守護神の山として戦国武将に尊ばれ、そして庶民の信仰を集めてきた信仰の山です。北条氏や徳川幕府、そして、近現代には帝室御料林や国定公園として、山内の自然保護や植林が進められました。江戸時代から現在まで、人々が諸願成就の返礼として行う杉苗奉納が続き、今なお多くの人の手により豊かな自然が守られています。

一方で、標高599メートルと低山ゆえの登りやすさから、ハイキングなどで楽しめる行楽地へと発展してきました。幕末には、横浜から浜街道(絹の道)を通してやってきた外国人も登山をしています。近代に入ると、多摩陵の造営を機に全国から多くの人々が訪れ、観光地としてにぎわいました。

そして現在、高尾山の登山客数は年間300万人に上り、世界一といわれています。これほど都心に近い場所にありながら、豊かな自然環境が守られ、悠久の歴史の中で育まれた自然と信仰が多様な魅力を生み出し、高尾山は人々を惹きつけ続けているのです。

高尾山頂から望む富士山

杉苗奉納の石碑

守られてきた歴史

天平16年(744年)に開山したといわれる高尾山薬王院は、「殺生禁断」を第一義に、寺法でむやみに草木を切り、山を荒らすことを厳しく戒めてきました。戦国の世に入ると、八王子城を築城した北条氏照が、戦略上重要な場所であった高尾山の竹林伐採を禁止する制札を発給し、江戸時代には、徳川幕府が財政確保のため高尾山の森林を保護しました。高尾山は、薬王院や戦国武将から徳川幕府まで時の為政者たちの保護により、長い間豊かな自然が守られてきました。



高尾山薬王院本堂



薬王院の参道に連なる杉苗奉納板

信仰の広まり

近世には、周辺の村々に住む人々は、火防せや無病息災などを高尾山薬王院に祈願しました。また、薬王院が養蚕農家に蚕を鼠から守る札を頒布したことから、薬王院は埼玉県や群馬県などの養蚕農家からも信仰を集めるようになりました。また、庶民の間で富士講が盛んとなり、その道中、低山である高尾山へ「高尾参り」に訪れ、関東一円から100を超える講中が集まったといえます。諸願成就のお礼として行う杉苗奉納は、高尾山信仰の特色の一つです。



高尾山は「修験道のお山」としても知られており、修行者は野に臥し山に臥しながら修行することから「山伏」と呼ばれるようになりました。彼らは大自然そのものを仏と感じ、種々の行を修めています。

高尾山薬王院では、水行として蛇滝・琵琶滝での滝行が、火行として日々の護摩供が行われています。特に毎年三月に行われる「火渡り祭」が有名で、飯縄大権現の衆生救済の誓願に基づいて諸願成就が祈願されます。また、火生三昧と呼ばれる火渡りでは、修行者に続き一般の人々も火を渡ります。



いにしえより高尾山は「祈りのお山」として信仰を集め、長年、多くの僧侶が修行を重ね、人々が参詣した霊場です。そのため高尾山薬王院の境内各所には、古くは江戸時代の「講碑」が多く残されています。このような碑は、高尾山薬王院を信仰する「講」と呼ばれる団体が、苗木などを奉納した際に建立しています。

現在でも巡礼の道場として、四国八十八か所の霊場の土を納めた「高尾山内八十八大師巡拝」や「仏舍利塔」、「百観音霊場御砂踏み」があります。

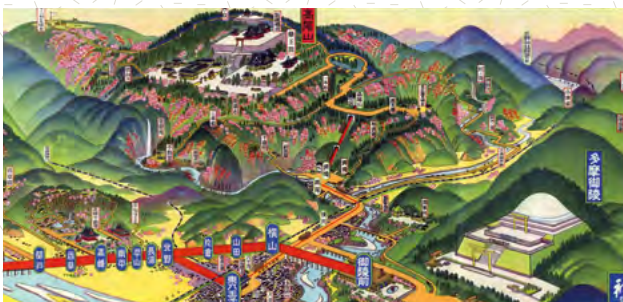
高尾山の歴史を語る 僧侶・山伏

観光地としての盛況

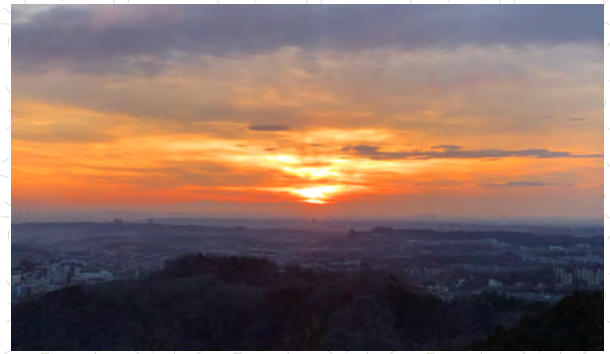
江戸時代になると、庶民の間で名勝巡りが流行し、高尾山に登る人々が増えていきました。幕末の横浜開港により、外国人が絹産業の視察などで八王子を訪れるようになると、遊歩限界地であった高尾山まで足を運ぶ外国人も現れるようになりました。

近代に入り、東日本ではじめて八王子に陵墓が造営されると、全国から大勢の参拝客が訪れ交通が整備され、大正末期から昭和初期の全国的な観光ブームと相まって、高尾山と武蔵陵墓地周辺は観光名所として知られていきました。

レクリエーションの需要が高まると、高尾山周辺は『都立高尾自然公園(現都立高尾陣場自然公園)』及び『明治の森高尾国定公園』に指定され、森林の保護を図りながら都民が自然に親しめる場となりました。



京王電車沿線名所図絵



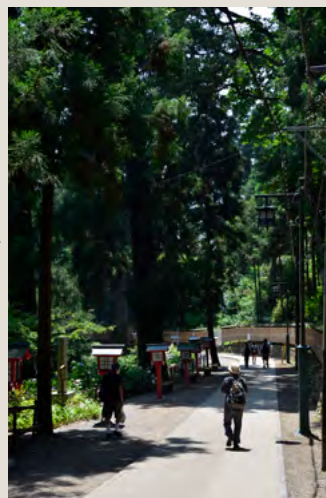
高尾山から朝日を望む

世界中から愛される山

高尾山は登山が気軽に楽しめる山として多くの人で賑わうようになった一方で、これまで守られてきた豊かな自然に甚大な影響を及ぼすゴミ問題が深刻化しました。そこで昭和50年(1975年)ごろから、薬王院・鉄道会社・地域が三位一体となって“ゴミの持ち帰り運動”を実施しました。関係者の団結・連携した地道な努力により、ゴミを持ち帰るというマナーは年々浸透し、高尾山はゴミのない山として本来の美観と清浄さを取り戻しました。そして平成19年(2007年)、都心から1時間ほどの距離にありながら、これだけ豊かな自然が残されている点が評価され、高尾山はミシュランで最高ランクの三ツ星を獲得し、今では年間300万人もの登山者が訪れる山になりました。

高尾山の歴史を語る 杉

参道に植えられたスギ並木は、都内では希有な存在です。都指定天然記念物で、樹齢は約七百年といわれています。古くから時の権力者たちに保護されてきた山だからこそ、現在も見ることができのです。



高尾山のスギ並木(都指定天然記念物)



高尾たこスギ(市指定天然記念物)



高尾山の豊かな自然

霊山として古くから人々によって大切に守られてきた高尾山。
そのため豊かな自然が残され、希少な生態系が魅力の一つとなっています。



動物



豊かな自然環境と植生を背景に、高尾山にはムササビやニホンリス、アカギツネ、ニホンアナグマなど、30種類近くの哺乳動物が暮らしています。なかでもムササビは高尾山を代表する動物として、訪れる人々にも愛される存在です。

ムササビ

本州・四国・九州の山地や丘陵地の林に生息し、樹上で生活しています。夜行性で、昼間は樹木にできた穴(樹洞)や家屋の屋根裏などを巣穴としていて、日没後30分ほどで巣穴から出て、木の葉や芽、種子などの食べ物を求めて活動を開始し、日の出前30分ほどになると巣穴に戻ります。移動の際に地面に降りることはなく、木から木へジャンプしたり、飛膜という膜状のひだをいっぱいに広げ、最大で樹木の高さの約3倍の距離を滑空します。高尾山では薬王院周辺などで見ることができ、観察会なども開催されています。

昆虫

高尾山ではこれまでに4000種を超える昆虫が確認され、箕面山(大阪府)、貴船山(京都府)と並び日本三大昆虫生息地に数えられています。古くから昆虫研究者や愛好者に親しまれ、明治のころから日本人のみならず外国人も頻繁に訪れ、国内外に標本が残されています。高尾山ではじめて発見された種も多く、タカオシャチホコやタカオメダカカミキリなど、「タカオ」の名を冠した昆虫も生息しています。

ムカシトンボ

名前のとおり、原始的な形質を残すとされる日本の固有種で、流量の安定した人為的改変の少ない溪流でしか見られません。高尾山は古くからムカシトンボの生息地として知られ、多くの人が観察・調査のため高尾山を訪れています。

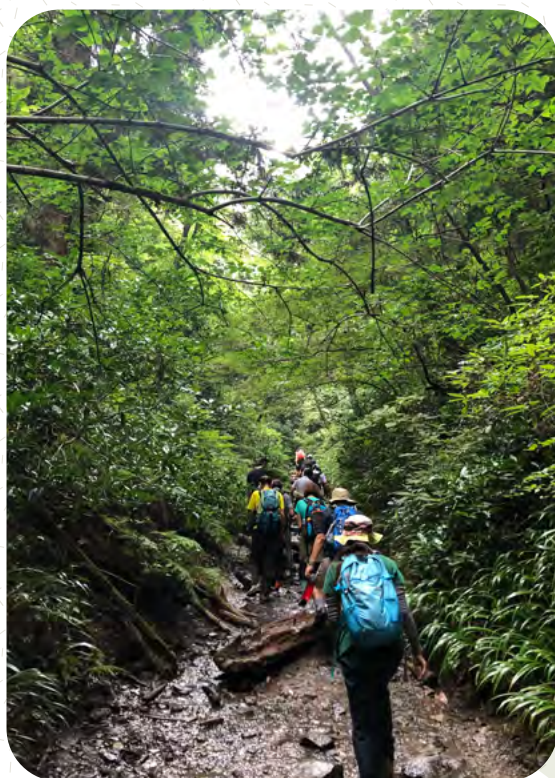


植物

高尾山には、都心から約40キロメートルという近距離にありながら、「天然林」ともいえる自然の林が残されており、ミシュランガイドでも三ツ星に評価されています。高尾山の登山道、1号路を挟んで北側斜面には落葉広葉樹林が、南側には常緑広葉樹林が見られ、2つの気候帯(冷温帯と暖温帯)の境目付近にあることも特徴の一つです。また、高尾山周辺には、イギリス全土に匹敵する1600種を超える植物が確認されています。

タカオヒゴタイ

高尾山で発見・命名された植物のうち、「タカオ」の名前を冠し高尾山を代表する植物といえばこのタカオヒゴタイが挙げられます。タカオヒゴタイは、明治42年(1909年)、植物学者の中井猛之進博士により発表されたキク科トウヒレン属の多年草です。草丈は50センチほどで、林縁に生え、茎の下部にはバイオリンのように中央がくびれた形をした葉を付けるのが特徴です。9～10月ごろには、茎の先に直径2センチほどのアザミに似た淡紅色の花を咲かせます。タカオヒゴタイは、高尾山のほか周辺の関東山地や多摩丘陵にかけても見ることができますが、分布は、東京・神奈川・山梨の1都2県に限られています。



自然研究路 (ハイキングコース)

大正期、東京市民の「日帰り観光地」として高尾山が注目されるようになると、その後到来した登山ブームも相まって、登山者が激増しました。さらに、昭和2年(1927年)に造営された多摩陵に全国から参拝者が訪れるようになると、その美しい自然景観が広く注目されるようになります。国や東京都は、豊かな自然環境の維持と活用のために国立公園や自然公園などの指定制度を設けます。高尾山とその周辺は「東京都立高尾自然公園」(昭和25年<1950年>)、「明治の森高尾国定公園」(昭和42年<1967年>)に指定され、森林レクリエーションの場としても発展してきました。また、国定公園指定を機に、高尾山の豊かな自然を観察することができるよう、難易度や景観、植生などの特徴別に、登山道が6つの自然研究路として整備され、高尾山の大きな魅力の一つになっています。

主な構成文化財

①高尾山



〔高尾町ほか〕

標高599メートルの山。東京都心から近く、年間を通じて多くの観光客や登山者が訪れます。古くから修験道の霊山とされ、信仰の対象として親しまれています。

②高尾山薬王院の建築物・仏像・古文書



〔高尾町〕

1～4： 都有 建築物 5～6： 都有 彫刻 7： 都有 古文書

1. 薬王院飯縄権現堂
2. 高尾山不動堂 附 須弥壇一基
3. 薬王院仁王門
4. 薬王院大師堂
5. 木造不動明王及び二童子立像
6. 木造地藏菩薩立像
7. 高尾山薬王院文書（郷土資料館に部分寄託）

高尾山薬王院は、行基菩薩によって天平16年（744年）に開山されたといわれ、その名は開山当時、薬師如来を本尊としたことに由来します。境内には、都の文化財に指定されている御堂や仏像などが残されています。また、薬王院の歴史を物語る古文書もあります。

③高尾山のスギ



〔高尾町〕

- 1～2： 都記 3： 市記
1. 高尾山のスギ並木
 2. 高尾山の飯盛スギ
 3. 高尾たこスギ
 4. 天狗の腰掛けスギ
 5. 江川スギ

高尾山には、樹齢700年といわれるスギの巨樹が存在しています。江川スギは、江戸時代末期に幕府の代官江川太郎左衛門が植えたものといわれています。

④殺生禁断の石碑



〔高尾町〕

高尾山には数多くの豊かな動植物が生息していますが、このような背景には、動植物をあやめたりすることを厳しく戒めて保護されてきた歴史があります。この石碑は、そのような高尾山の歴史を物語っています。

⑤火渡り祭

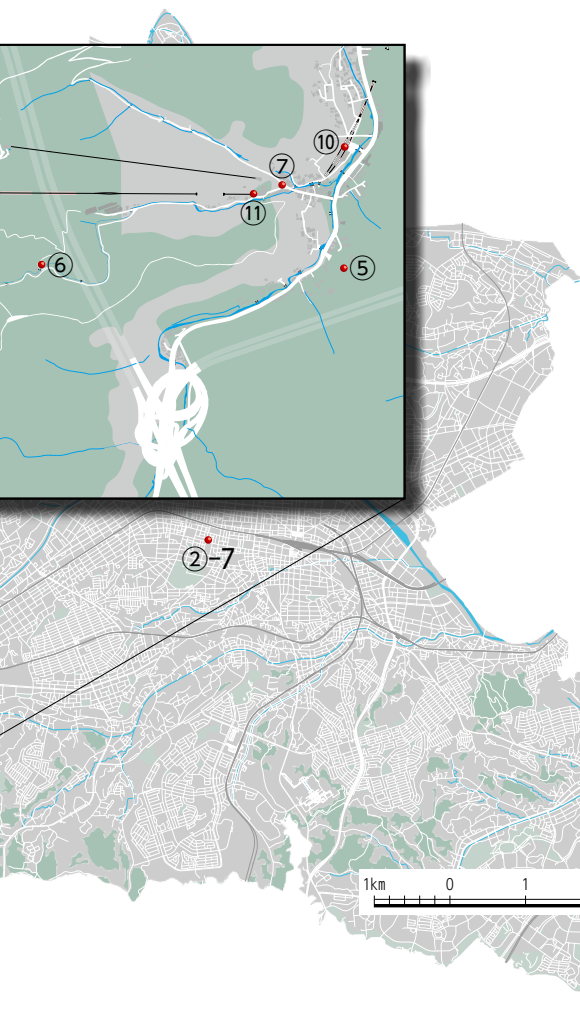


高尾山薬王院が野外で行う大規模な護摩法要で、「護摩木」という木製の札を焚いてその上を素足で渡り、除災開運を願う行事です。毎年3月に開催され、修験者が火渡りを行い、続いて一般の人々も火を渡ることができます。

都府：都指定有形文化財
都記：都指定天然記念物

市記：市指定天然記念物

※⑧は位置が示せないため地図上にはありません



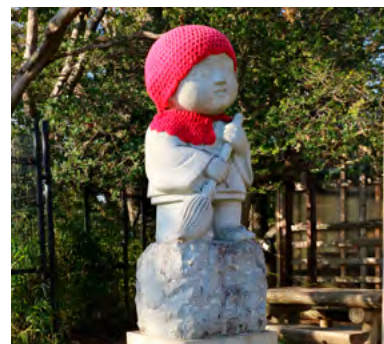
⑥水行道場



〔高尾町〕

山岳信仰に由来する滝への崇拝と結びついたのが「滝行」です。蛇滝と琵琶滝は、高尾山薬王院の水行道場として使われています。現在も、修験者による滝行が行われているほか、一般の方も修行することができます。

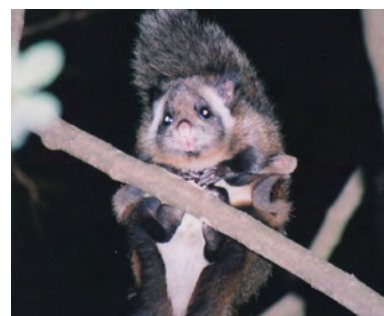
⑦おそうじ小僧



〔高尾町〕

昭和50年(1975年)ごろから始まったゴミ持ち帰り運動。その発祥の地のシンボルとして、平成5年(1993年)に山麓広場と山頂におそうじ小僧が建立されました。

⑧高尾山のムササビ



古くは千人同心組頭の植田孟縉が文政6年(1823年)に編さんした地誌『武蔵名勝図会』に、高尾山のムササビが描かれており、昔から親しまれてきた動物です。現在、高尾山では、日没後や日出前に薬王院周辺などでその姿を見ることができます。

⑨高尾駅舎(JR高尾駅北口)



〔高尾町〕

全国的にも珍しい寺社建築風の駅舎で、「関東の駅百選」に選ばれています。この駅舎は、大正天皇御大喪に使用した「新宿御苑仮停車場」を移設したものです。移設当時は浅川駅でしたが、昭和36年(1961年)に高尾駅に改称、高尾山への玄関口として、年間を通して観光客でにぎわっています。

⑩高尾山口駅舎



〔高尾町〕

平成27年(2015年)に竣工した京王電鉄高尾山口駅の新しい駅舎です。新国立競技場と同じ、建築家隈研吾氏の設計によるものです。駅舎には観光案内所「むささびハウス」が設けられ、外国からの来訪者向けに多言語でのサービスも行っています。

⑪高尾山ケーブルカー(高尾登山電鉄)



〔高尾町〕

増加する訪問者の利便を図るために計画され、大正9年(1920年)、薬王院の関係者や地元浅川村の有力者らが発起人となり、敷設免許が申請されました。昭和2年(1927年)に開業したケーブルカーの最急勾配は31度18分、ケーブルカーの線路では「日本一の急勾配」となっています。

文化財の保存・活用事例

森林パトロール隊による森林保全

高尾山には、豊かな自然を守る活動を行っている団体がいくつかあります。中でも古くから継続して活動を行っているのが、昭和42年(1967年)に結成された八王子森林パトロール隊です。この団体の特徴は、子どもたちが清掃活動をしながら自然を守り、ゴミの持ち帰り運動を展開してきたことです。こうした活動は、平成19年(2007年)に高尾山が「ミシュランガイド」の三ツ星を獲得したことや今日の高尾山人気に大いに貢献してきたといえるでしょう。

現在も、子どもたちが高尾山の自然や歴史に親しみながら、それらを大切にする気持ちや仲間との友情、そして八王子への郷土愛を育む活動を継続しています。



自然体験を通じた魅力の発信

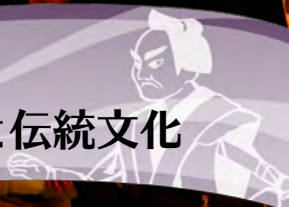
高尾山の山頂には、インタープリター(自然解説員)が常駐する「高尾ビジターセンター」があり、展示や自然体験ツアーを楽しむことができます。麓には、自然体験だけでなく森林や林業について学ぶことができる「高尾森林ふれあい推進センター」や、国内有数の生物多様性を誇る高尾山の動植物を、見て、触れて、学べる「高尾599ミュージアム」があります。訪れる人々に、高尾山の豊かな自然環境や歴史文化の魅力を伝えています。



高尾森林ふれあい推進センター



高尾599ミュージアム



どのような思いで
伝統文化やお祭りは
受け継がれている？

八王子には、個性豊かな獅子舞や八王子車人形などの伝統芸能が継承され、関東屈指の山車まつりといわれる八王子まつりをはじめとする、今も昔も人々の熱気が集結するお祭りが、各地域で行われています。こうした伝統文化は、伝承者や担い手なくしては成り立ちません。そこにはどのような思いがあるのか、読み解いてみましょう。

関東屈指の山車祭り「八王子まつり」

市内各地では、郷土の誇るお祭りや伝統芸能が継承され、各家庭では、今も大切にされている様々な年中行事があり、私たちは、歴史や文化を身近に感じながら暮らしています。

八王子に古くから伝わる9つの獅子舞は、五穀豊穡や雨乞いを願って神社に舞を奉納してきました。江戸時代中ごろには、宮大工たちが八王子独自の彫刻山車を造り、お祭りを彩る山車文化を築き、8月上旬に行われる八王子まつりでは各町内の山車が曳かれ、多くの人々で市街地がにぎわいます。幕末から明治にかけて、庶民の娯楽として車人形が八王子や周辺の村々に広まりました。これらの伝統文化は、町内・自治会や保存会、子ども会などによって継承されています。

永福稲荷神社のしょうが祭など祭礼の場で奉納される縁起を担ぐ食物は、厄除けや無病息災を願う人々によって脈々と受け継がれています。八王子のお祭りや伝統芸能は時代により様々に変化しながら、人々の思いと共に現在に伝えられています。



だんど焼き（上川町中部町会）



八王子車人形

八王子車人形

初代^{にしかわこりゅう}西川古柳(山岸柳吉)が考案した一人遣いの人形芝居「車人形」は、説経節を地語りとして、幕末から明治にかけて八王子をはじめ周辺の村々に広まりました。人形遣いが「ロクロ車」に腰かけて演じるのが特徴で、庶民の娯楽として親しまれてきました。八王子では現在、下恩方町の西川古柳座が車人形を伝承しています。西川古柳座では、臨機応変に対応できる人形の動きを活かし、バレエや落語など、様々な分野の芸能と共演するなど、新しい演目にも積極的に取り組んでいます。また、日本国内はもとより世界各地で精力的に公演活動に取り組んでいます。



▲次代の八王子車人形を担う「西川古柳座若手の会」の座員たち。人の情理を深く魅せる一人遣いの人形芝居を演じるため、日々鍛錬しています。

説経浄瑠璃

説経節(説経浄瑠璃)とは、もともと仏教の経典を説くものでしたが、次第に様々な音楽や人形などと結びついて民衆芸能化した語り芸です。江戸時代後期に初代薩摩若太夫により再興され、やがて多摩地方へ伝わり、写し絵や車人形の地語りにもなりました。昭和のはじめごろまで、農山村の若者の娯楽として盛んに行われていました。



説経節を継承する「説経節の会」(東京都無形文化財保持団体指定)には、約50人の会員がいます。月2回の稽古のほか、古い台本を読む研究などをして、八王子をはじめとする多摩の地で愛され、楽しまれてきた説経節を継承しています。



八王子まつり

毎年、甲州街道沿いの市街地で、8月上旬の週末に、本市最大の夏祭り「八王子まつり」が開催されています。

昭和36年(1961年)に、新旧住民の融和を目的に、八王子市民祭が開催されました。昭和43年(1968年)に八王子まつりと改称し、市街地東部の八幡八雲神社の祭礼「下の祭り」と西部の多賀神社の祭礼「上の祭り」で曳かれていた町内の山車が参加するようになりました。現在では「関東屈指の山車まつり」で知られ、神輿渡御・山車巡行といった伝統文化を継承しながら、子どもからお年寄りまで世代を超えて、また地域の絆を深めて交流できる八王子の伝統を代表する行事となっています。また、神輿1基と山車12台、山車人形5体が市の有形文化財(工芸品)として指定されています。

山車巡行を構成する人々



かしらしゅう
頭衆

山車の巡行(梶取り)や各地区の神酒所の設営などを取り仕切ります。町内頭は鳶職が務め、八王子消防記念会に属しています。



はやし
囃子

山車の上で、太鼓・とんぼ・鉦による演奏に合わせ、様々な面を付けた舞を披露します。八王子まつりでは、目黒流、神田流、神田下町囃子、神田囃子山の手流、浜の手流、重松流の各流派が演奏しています。



やねがた
屋根方

3~5名の若衆が山車の屋根に上り、巡行時の安全確認や進行の合図を出す役目を担っています。



ひきこ
曳き子

山車を綱で曳く人をいいます。「イーチ、ニーノ、ヤーイ」の掛け声とともに曳きます。町会の役員などは、浴衣に花笠を纏い、かつては「旦那衆」と呼ばれていました。



てこまい
手古舞

手古舞は、梶子という木遣が元といわれています。梶子を唄うと、どんな大きな物でも動かせるとされてきました。八王子の手古舞は、明治後半から大正初めごろに始まったといわれています。



きやり
木遣

木遣とは、元は多人数で仕事をするときの掛け声が唄となったものです。八王子消防記念会が江戸時代後期より継承し、現在では、祭りの練歌として唄われ、山車の巡行開始時などに町内頭により唄われます。

獅子舞

八王子の村々で受け継がれてきた行事の一つに「獅子舞」があります。獅子舞はその地域の五穀豊穡、雨乞い、悪魔退散などを祈願して舞われます。八王子の獅子舞は一人立ちの三匹獅子舞で構成され、氏子や檀家内の地域をまわり、神事として寺社の境内で舞を奉納します。この獅子の行列には、軍配持ちなどを先頭に、花笠、唄方や笛方、幣負いなどが加わります。

四谷・狭間・小津・山入・今熊・田守・氷川・石川の地域では、地元の祭礼として舞われています。各地域では保存会を中心に、子どもたちにも継承されています。



三匹獅子舞（山入の鯰獅子舞）



花笠（今熊神社の獅子舞）



軍配（狭間の獅子舞）



笛方と唄方（小津の獅子舞）

縁起を担ぐ食

「お祭りでは豊作を祈って〇〇を供える」「〇〇を食べると風邪をひかない」など、伝統行事や地域での言い伝えで受け継がれている食材や料理が身の回りにたくさんあります。八王子には、しょうが祭、だんご祭、まんじゅう祭で縁起を担ぐ食物が販売されています。これらは元来、人々が願いを込めて奉納していたものです。食物に託す人々の思いは、大切にしていきたい伝統文化です。

無病息災

厄除け



しょうが祭（永福稲荷神社例大祭）



まんじゅう祭（諏訪神社例大祭）



だんご祭（浅間神社例大祭）

年中行事



どんど焼き

毎年「小正月」に合わせて行われる「どんど焼き」では、正月の門松や書き初め、お札、祈願が達成された「だるま」などを持ち寄り、火をつけて焚き上げます。そしてその火で「マユダマ」（繭玉）と呼ばれるお団子を焼いて食べます。「無病息災に御利益がある」とわれています。



七夕（あさがお市）

短冊に願い事を書き笹などに飾る風習は、江戸時代に始まったといわれています。また、朝顔は織姫を指し、縁起の良いものとされていました。毎年7月、西放射線ユーロードでは「夏の風物市」と題し、八王子産あさがおをはじめ、夏の涼を感じさせる江戸風鈴や八王子の物産品などの販売が行われます。同時に縁日、人力車などの各種イベントも開催されます。



こいのぼり

住宅環境の変化などにより、こいのぼりを揚げる家庭は少なくなりましたが、子どもの健やかな成長を願う気持ちは昔も今も変わりません。

長房市民センター前の南浅川両岸には毎年5月5日までの数週間、約1000匹ものこいのぼりが空を泳ぎます。近隣の幼稚園児・保育園児が作った可愛い手作りこいのぼりも泳ぎ、「八王子八十八景」にも選ばれています。

伝統食



酒まんじゅう



団子

江戸時代から物流の要所の宿場町として栄えた八王子には、多くの飲食店が軒を連ねていました。市内には、現在でも老舗の和菓子屋が多く、八王子和菓子組合は100年以上の歴史があります。特に酒まんじゅうと団子は古くから市民に愛されてきました。

主な構成文化財

①八王子車人形



都無 芸能

文政8年(1825年)に現在の埼玉県飯能市に生まれた山岸柳吉(初代西川古柳)によって、江戸時代の終わりごろに考案されました。平成8年(1996年)には国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選定されています。

②説経浄瑠璃



都無 芸能

説経浄瑠璃は説経節ともいい、元は仏の教えを説くための仏教の法談などから生まれたといわれています。人形芝居などと興行して江戸で人気を博すようになった後、八王子にも伝わり、現在まで受け継がれています。

③上案下のセエノカミ



市無民 風俗習慣

〔上恩方町〕

正月7日に家庭から持ち寄った正月飾りなどを、竹や縄で作った「セエノカミ」にまとめ、14日に焚き上げる行事です。焚き上げる際には、人々が火を囲んで、養蚕の無事や無病息災などを祈願し、「マユダマ」と呼ばれるお団子を焼きます。



④宮神輿と山車・山車人形



1,3~16: 市有 工芸品

1. 多賀神社神輿(三輪御所車含む)
2. 八幡八雲神社神輿
3. 三崎町の山車
4. 中町の山車 付 山車人形「諫鼓鳥」
5. 元横山町の山車
6. 南町の山車 付 山車人形岩座
7. 大横町の山車
8. 本町の山車
9. 八幡町(旧一丁目)の山車 付 山車人形「神武天皇」(岩座を含む)
10. 八幡町(旧二丁目)の山車 付 山車人形「諫鼓鳥」(岩座を含む)
11. 八幡上町の山車
12. 八木町の山車
13. 追分町の山車
14. 日吉町の山車
15. 横山町三丁目の山車人形「織田信長羅陵王」及び大獅子頭
16. 上八日町の山車人形「素戔鳴尊」

17. 元本郷町の山車
18. 小門町の山車
19. 千人町一丁目の山車
20. 平岡町の山車
21. 八日町一・二丁目の山車 付 山車人形「雄略天皇」
22. 横山町三丁目の山車
23. 上八日町の山車
24. 南町の山車人形「応神天皇」
25. 本町の山車人形「浦島太郎」

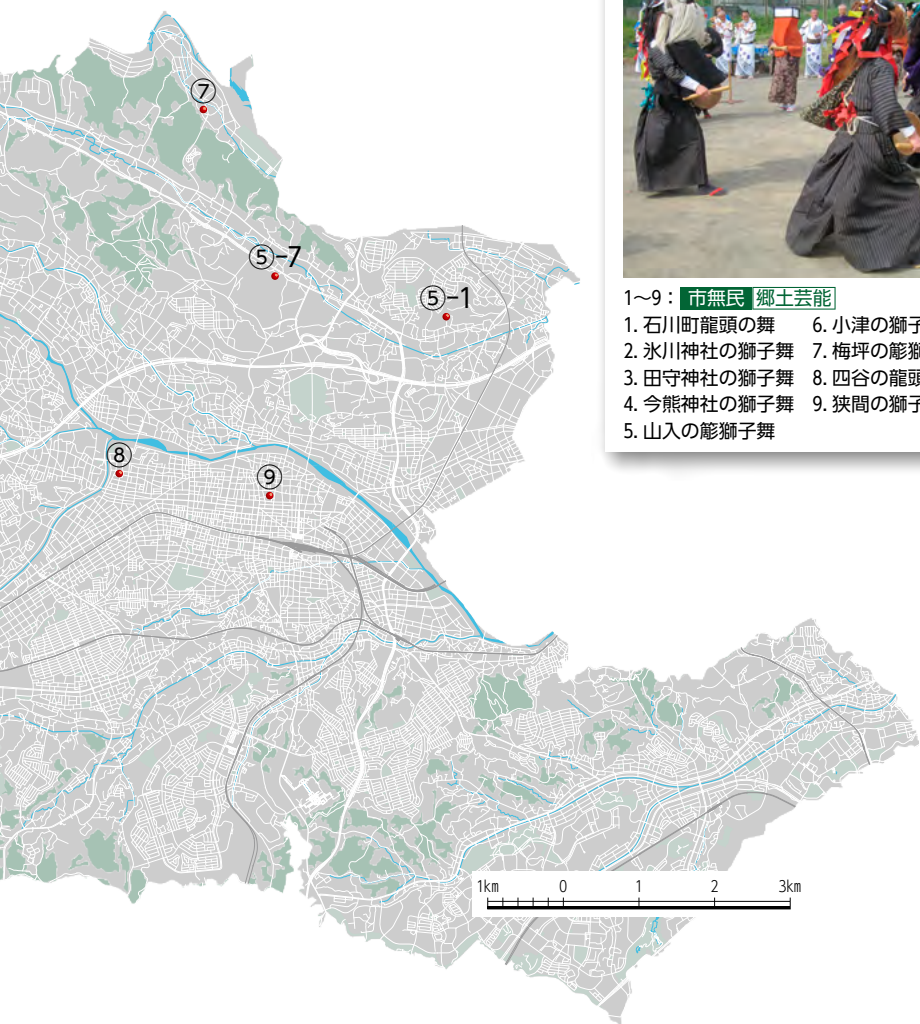
八王子まつりに参加する神輿や山車は、多賀神社の「上の祭り」と八幡八雲神社の「下の祭り」から継承された神輿・山車に、新たに建造された山車も加わり、今では「関東屈指の山車まつり」と言われています。神輿や山車、山車人形などの中には、文化財の指定を受けているものも多く、大火や戦災を乗り越えたものもあります。

都無：都指定無形文化財

市有：市指定有形文化財

市無民：市指定無形民俗文化財

※①②④⑥は位置が示せないため地図上にはありません



⑤八王子の獅子舞



1～9：市無民 郷土芸能

1. 石川町龍頭の舞
2. 氷川神社の獅子舞
3. 田守神社の獅子舞
4. 今熊神社の獅子舞
5. 山入の籠獅子舞
6. 小津の獅子舞
7. 梅坪の籠獅子舞
8. 四谷の龍頭舞
9. 狭間の獅子舞

八王子では、9つの獅子舞が市指定の文化財として継承されています。獅子舞は、武士の間では武運長久、農民の間では五穀豊穡や厄除けとして舞い、受け継がれてきました。現在、地域での祭礼や八王子まつりなどで舞われています。

⑥木遣



市無民 郷土芸能

八王子の木遣は江戸木遣りの流れを汲み、元治元年(1864年)、本郷政という木遣師が当時の消防組員に伝承したのが始まりといわれています。当時、木遣唄は65種類あり、台本も残されていますが、そのうち17種類が市の指定を受けています。

⑦福の神



(高月町)

江戸時代に始まった行事で、毎年1月7日に、小学1年生から小学6年生までの、町内に住む子供たちが、背中に正月のお飾りを背負い、福俵を持って全ての家々を訪れ、福俵を家の中へ投げ込んだり引き寄せたりしながら、家に福の神が入り貧乏神を追い出す唄を唄うという高月町滝地区の伝統的な行事です。

⑧多賀神社



(元本郷町四丁目)

一説には鎌倉時代に起源を持つともいわれ、八王子の西の鎮守社として広く崇敬を集めた神社です。境内には、織物に由来する機守神社もあります。江戸時代には、多賀神社で行われた祭礼を「上の祭り」と称して執り行っていました。現在行われている八王子まつりでは、多賀神社の千貫神輿が上地区の見所の一つになっています。

⑨八幡八雲神社



(元横山町二丁目)

八幡神社と八雲神社を合祀した神社で、延長2年(924年)に石清水八幡宮を祀ったことが起源とされています。江戸時代には、八幡八雲神社の祭礼を「下の祭り」として執り行い、多賀神社の「上の祭り」とあわせ、桑都市中の二大祭りとして知られていました。八王子まつりでは宮神輿渡御が下地区の見所の一つになっています。

文化財の保存・活用事例

伝統文化ふれあい事業

八王子の豊かな伝統文化、芸能を気軽にみて、きいて、ふれることで、あらためて八王子の良さを知り、その魅力を発見できる講座を伝統文化ふれあい事業実行委員会が開催しています。

八王子車人形の体験・発表講座、説経節体験・発表講座、篠笛の体験・発表講座などを行っています。



木遣の継承

市指定無形民俗文化財(郷土芸能)の木遣は、江戸木遣りの流れを汲み、元治元年(1864年)に本郷政という木遣師が、八王子の町火消しである消防組員に伝授したといわれています。八王子消防記念会は天明年間(1781~1789年)から続くといわれる八王子の消防組の伝統を継承し、出初式(1月)や高尾山薬王院の春季大祭(4月)、八王子まつり(8月)などで、木遣唄やはしご乗りを披露しています。



祭囃子の継承

祭囃子は、八王子まつりや市内の神社等で行われる祭礼には欠くことのできない音色です。平成6年(1994年)に「八王子祭囃子連合会」が発足し、現在では八王子市と周辺の20を超える祭囃子の団体が所属しています。同会は相互のお囃子研鑽と、子どもたちにお囃子を通して故郷を愛する心を育んでもらい、健全な育成を願い活動し、八王子の祭囃子を継承しています。



地名や石碑に残る地域の記憶

地名や石碑には

どんな思いが刻まれている？

長い間同じ土地に住んでいると、人は地名に愛着を感じるようになります。また、路傍に残された石碑には、その場所の歴史を語り継ぐとした人々の思いが刻まれています。そこには、どのような思いや記憶がこめられているのでしょうか。各地域に残る地名や石碑の由来を紐解いてみましょう。

甲州街道イチョウ並木

「八王子」という地名の由来は、延喜16年(916年)に妙行という僧が現在の元八王子町にある深沢山の麓に庵を建て、牛頭天王と8人の王子を祀り、八王子権現と称したという伝説に基づくといわれています。

八王子の「横山」「由井」「川口」といった地名は、古代から現在に至るまで使われ続けている地名です。千人頭や八王子千人同心の組頭の拝領屋敷があったことから地名になった「千人町」、大久保長安の屋敷裏門前にあった宿を「御門宿」または「於門宿」と呼んでいたことから転じた「小門町」、かつて、高台にあるのに湧き水が出て「高所水」と呼ばれていたことから転じた「御所水」など、そこに住んだ人や特徴的な地形にちなむ地名も多くあり、地域の歴史をしることができます。

また、道端に建つ石碑や道標、橋の名称にも、その土地の歴史が刻まれています。それぞれの地名や石碑の由来を紐解くと、思わぬ発見があるかもしれません。



かつて千人頭が住んでいたまち 千人町の標識



甲州街道と陣馬街道の分岐点 追分の道標

案内（南浅川町）

この地域を通して東西を往来する人々を道案内する人が住んでいたという説や、高尾山へ道案内する人が住んでいたという言い伝えがあります。

八王子

八王子という現在の市名の起源は、八王子城跡にある八王子神社に由来しています。



とどろまち 廿里町

鎌倉から20里の距離にあったから付けられたとの説がありますが、定かではありません。

たてまち 館町

平安時代に鎌倉権五郎景正（景政）の館があったからとも、戦国時代の近藤出羽守の館があったからとも伝えられています。

並木町

昭和4年（1929年）に植えられた甲州街道のイチョウ並木にちなむといわれています。



おおふね 大船

沼地に船橋を作って通ったことに由来するといわれています。



ごしょみず 御所水（台町）

かつて、高台にあるのに湧水が出たことから、高所水と呼ばれていました。それが転じて御所水となったといわれています。



鍵水

多摩丘陵の斜面に槍のように尖らせた竹筒を打ち込んで飲料水を得ていたといえます。この方法を「ヤリミズ」と言い、地名の由来になったといわれています。



北野

横山党の一族が京都の北野天満宮を当地に勧請し、北野の地名となったといわれています。



※ここで紹介した由来以外にも他の説があります。

ヒルクボ（上恩方町）

「行くだけで昼になる」という意味で、桑摘みに行くだけで一日仕事だったそうです。

いぶかな ぶかな 壱分方と貳分方

鎌倉幕府御家人の天野景広と弟頼茂が父景茂の遺領である由井本郷を巡り相論を起こしました。その結果、弟が兄に「由井本郷の三分の一」を譲ることで解決したそうです。兄は「壱分方」が譲られ、弟は「貳分方」を相続しました。このことが現在の「上壱分方町」「貳分方町」のルーツです。

どうどめき（小津町）

谷川の水が激しく落ちている場所、轟くような水音から転じてどうどめきになったといわれています。

まごめ 馬込・松木（美山町）

かつて鎌倉古道が通っていたことから馬の込場があり、松木は馬次が転じたものといわれています。

もちかごり 持籠入（上川町）

馬を降りて荷物を担いでいったことから名付けられたといわれています。

千人町

千人頭や八王子千人同心の組頭の拝領屋敷があったことから町名となりました。

とどろ 留所（加住町）

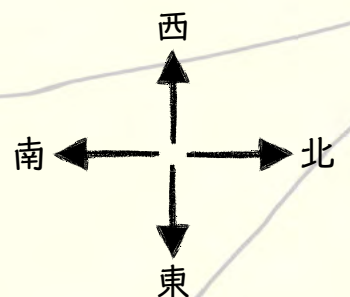
谷地川にヤナをかけて魚を獲る場があったことからこの名がついたといわれています。

加住

山伏の縄張りを示す「霞」に由来しているといわれています。

ひよどり山（噺町）

武田信玄・勝頼父子の一軍が、滝山城攻撃の際に陣を敷いた場所を「兵取山」と呼んでいたといわれています。それが転じてひよどりの地名になったと伝えられています。



はちおうじを物語る 地名のあれこれ

地名の由来を知ること、地域の歴史を知ることができます

石碑や橋が語る 地域の記憶

地域の記憶を語るのは、地名以外にもあります。
石碑や橋といったものにも刻まれています。

馬場横丁（千人町二丁目）

この横丁は、甲州街道の千人町二丁目付近に建つ山梨中央銀行の角から宗格院までを結ぶ横丁で、江戸時代に宗格院の北側から西側にかけて千人頭の馬場訓練場が設けられていたことから名付けられたといえます。



三条実美の歌碑（裏高尾町）

太政大臣^{さんじょうさねとみ}三条実美が高尾山薬王院に納めた歌「御巡幸の供養にて甲斐路にてよめる 来てみればこかひはた織いともなし 甲斐のたび路の野のやまのべ 実美」と刻まれた歌碑です。八王子が養蚕や製糸、機織業で栄えている様子を詠っています。



石碑



今熊山大権現道標（上川町）

小峰峠の麓に「呼ばわり山」として信仰を集めた今熊山へ向かう道を示す道標があります。また道標の付近には、昭和10年(1935年)から平成8年(1996年)まで、今熊神社の鳥居が建っていました。



先賢彰徳碑（裏高尾町）

小仏関跡の敷地内に「先賢彰徳碑」と刻まれた石碑があります。この碑は、幕末から明治にかけて活躍した国学者^{せんけんしょうとくひ}落合直亮・直澄兄弟^{おちあいなのおき なおずみ}と川村正平の功績をたたえ、昭和5年(1930年)に建立されました。

^{かみや}
紙谷橋（西寺方町）

江戸時代、多摩郡由井領寺方村に「紙屋(谷)」という小名がありました。中世には大幡紙おほはたがみという紙がこの付近で生産され、近世には乙津村(現あきる野市)に製法が伝播し、乙津村のほか、その周辺集落では軍道紙ぐんどうがみとして昭和40年(1965年)代まで生産されていました。養蚕や、製茶のほか、杉樽の目地に使用されました。



^{みなせ}
水無瀬橋（日吉町—横川町）

陣馬街道と南浅川が交わる一帯は砂礫層の下を水が流れていたことから、江戸時代には「水無川」と呼ばれていました。この名が橋名の由来となりました。



橋



^{よめいり}
嫁入橋（鍵水）

嫁入橋は「嫁入谷戸」という谷戸名からきています。地域に残る伝説によると、昔、ミコノサワ(沢)には巫女がいました。あるとき、近くの谷戸から村人が踊っていた巫女をめがけ弓を射ました。射られた巫女はなんと狐だったといいます。この伝説が基で「弓射谷戸」と呼ばれるようになり、それが訛って「嫁入谷戸」になったといわれています。



^{しらはた}
白旗橋（小比企町）

湯殿川に架かる白旗橋は、昭和27年(1952年)に架橋されました。この橋には、鎌倉幕府の初代将軍、源頼朝が源氏の白旗を掲げて大軍を渡したとの伝説が残っています。近隣には、白旗という地名や白旗神を祀る白旗社があります。

主な構成文化財

①八王子神社



〔元八王子町三丁目〕

八王子という現在の市名の起源は、八王子城山（深沢山）にある八王子神社に由来しているといわれています。

②子安神社



〔明神町四丁目〕

子安町の名称の由来となっているのは、八王子市域で最古の草創年代を伝えている子安神社です。天平宝字3年(759年)に淳仁天皇の妃である栗田諸姉の安産祈願のため、子安明神が祀られたことが起原とされています。

③廿里古戦場



市旧

〔廿里町〕

鎌倉から20里の距離にあったことから十里と名付けられたとの説がありますが、定かではありません。永禄12年(1569年)に、武田信玄が滝山城に居城する北条氏照を攻める際に合戦が起こった場所でもあります。

④困民党之碑



〔中野山王二丁目〕

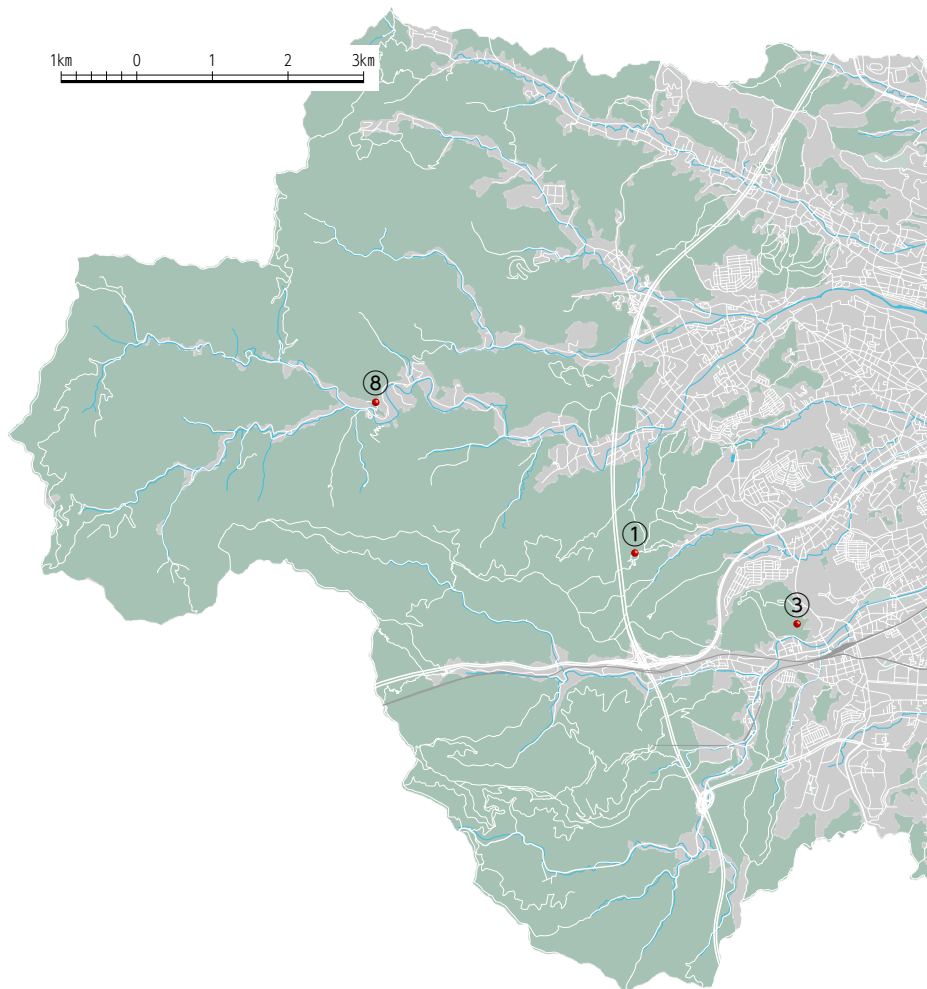
明治14年(1881年)の松方財政により貨幣価値が向上すると、負債利子や元金が急激に膨れ上がったため、養蚕・製糸を営む農民が中心となって困民党を結成し、利子の減免や年賦償却などを要求する運動を展開しました。

⑤善太郎坂碑



〔丹木町三丁目〕

丹木町三丁目から谷野町に向かう坂を「善太郎坂」といいます。昭和45年(1970年)ごろまで、坂下に洋画家の小島善太郎が住んでいたことに由来します。小島は「多摩梅咲く里 八王子」「八王子丹木の冬庭」「滝山城趾より多摩川を望む」など、八王子の風景画を描き残しています。





⑥横川榎子先生像



(明神町四丁目)

東京都立南多摩中等教育学校の前身、八王子女学校の創始者である横川榎子^{はこかわのりこ}の像で、昭和10年(1935年)に建てられました。榎子は多摩郡横川村(現横川町)の名主の家に生まれ、多摩の幼児教育、女子教育発展に大きく尽力しました。

⑦八王子千人同心屋敷跡記念碑



(追分町)

八王子市の甲州街道沿いに「千人町」という町があります。これは江戸時代に八王子千人同心の屋敷地だったことから町名になりました。この碑は、昭和35年(1960年)に建てられました。

⑧夕焼小焼の碑



(上恩方町)

宮尾神社には、「夕焼小焼」を作詞した中村雨紅の歌碑があります。郷愁を誘う名曲を生み出した中村雨紅は、宮尾神社の宮司の三男として生まれました。歌碑は、中村雨紅の還暦を祝して昭和31年(1956年)に建てられたものです。

⑨牛魂碑



(下柚木)

由木村は、多摩地区ではじめて酪農が導入された地です。以後、「牛の村」や「酪農の先駆村」として知られるようになりました。「牛魂碑」は、由木村搾乳者一同によって永林寺境内に昭和25年(1950年)に建てられました。

⑩あゆ塚



(日吉町)

浅川で採れた鮎を江戸幕府に献上していたことを伝えとともに、鮎の霊を慰めるため、日吉八王子神社の境内に昭和32年(1957年)に建てられました。

⑪東京府立第二商業学校の碑



(上野町)

大正9年(1920年)に上野町に開校し、その後東京都立第二商業高等学校と改称し、台町へ移転しました。東京都立八王子工業高等学校と統合して東京都立八王子桑志高等学校となって現在に至ります。碑は、開校時に校舎があった場所に建てられています。

文化財の保存・活用事例

郷土の歴史を再発見するきっかけづくり

八王子市では、市民の誰もが楽しみながら健康づくりができるようにと、ウォーキングマップ「ハッチー・ウォーク」を作成しています。このマップには、「八王子景観100選」や「八王子八十八景」などを取り入れており、市内の歴史や自然・景観・文化・彫刻を感じながら歩けるコースとなっています。四季折々の八王子を楽しみながら、その場所に刻まれた歴史に思いを巡らせ、地域の魅力を再発見することができます。



市民に親しまれている道路が物語る歴史

通勤・通学・買い物や散歩にと、毎日何気なく使っている道路。道路の名称にも、文化財や歴史的な由来のある地名・坂・橋などにちなんだものがあり、地域の歴史を知ることができます。

本市が作成した「八王子道路愛称マップ」には、櫛田遺跡公園通り、御所水通り、松姫通りなど、地域の記憶が刻まれた愛称がつけられた道路が載っています。



橋本義夫の記念碑建立活動

万葉公園には、名前の由来となった石碑が建っています。碑の正面には、「赤駒を 山野に放し 捕りかて 多摩の横山 かしゆかやらむ」。そして碑の裏面には、「この碑は七五五年武蔵野の片ほとりに住める主婦の作なり。万葉集に収めらる。この小碑は作者と同郷なる多くの人々の手によって多摩の横山にたつ。一九五四年四月東京多摩有志」とあります。

碑には「東京多摩有志」とありますが、八王子の郷土史家である橋本義夫が立案し、実現させたものといいます。八王子とその周辺地域には、橋本義夫の建碑運動によって建てられた石碑が数多くあります。

